

第4章 シリア：権威主義体制に対するクルド民族主義勢力の挑戦

著者	青山 弘之
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
シリーズタイトル	研究双書
シリーズ番号	555
雑誌名	西・中央アジアにおける亀裂構造と政治体制
ページ	159-209
発行年	2006
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00011859

第4章

シリア：権威主義体制に対するクルド民族主義勢力の挑戦

青山 弘之

はじめに

権威主義体制のもとで亀裂は政治にいかに関与するのか？ 本書第1章（総論）における先行研究サーベイで指摘されているとおり、この問いに対しては、これまで2つの両義的な見解が示されてきた。第1に、権威主義体制の成立にともなう政党制の崩壊によって、亀裂構造が破壊され、亀裂と政治の結びつきが失われるというものである。この見解は、議会制民主主義を経験した後に共産主義政権の樹立によって権威主義体制へと至った（そしてその後、さらに第3の民主化の波のなかで再民主化した）東欧諸国の研究において優勢である。第2に、権威主義体制のもと、政権（国家）が自らの支配を維持・強化するために、社会に内在する亀裂を操作するというものである。この見解は、宗教、エスニシティ、言語などの差異に基づく亀裂の強調や非政治化が企図されたアフリカ諸国の研究において見られる（本書10 - 11ページを参照）。このうち第1の見解は、第2の見解との関連において、東欧諸国以外の国や地域にあてはめることに一定の留保を要する。他方、第2の見解は、国家による社会の支配のありようを理解するには有効であるものの、国家に対する社会のリアクション（抗国家運動）、政権内の権力闘争、社会（抗国家運動）内の政治的営為に亀裂がどう関わっているかを説明していない。

以上のような問題意識のもと、本章では、中東・アラブ世界における権威

主義国家の代表格とみなされるシリア・アラブ共和国の政治と亀裂の関係を
 取り上げる。アラブ民族主義を国是とする同国の政治（あるいは思想）に関
 する研究は、そのアラブ民族性をさまざまな見地から論じてはきたが、そこ
 で暮らす人々の多様な民族性・エスニシティに起因する亀裂が分析対象にな
 ることはほとんどなかった。そこで本章では、シリアの民族・エスニック集
 団のうち、国内最大のマイノリティであるクルド人に焦点をあて、彼らの民
 族性に起因する亀裂が同国の政治にどのように反映されてきたのかを明らか
 にする。具体的には、バッシュール・アサド（Bashshār al-Asad）政権（2000
 年7月発足）下でもっとも活発な活動を行っている政治勢力（反政府勢力）^{1）}
 のひとつであるクルド民族主義勢力の動静に着目し、クルド民族性に起因す
 る亀裂を体現する彼らの活動や政権の政策が、この亀裂によっていかに規定
 されているのかを分析する。

以下ではまず第1節で、シリアにおける亀裂構造と政治体制の関係を概観
 する。第2節では、クルド民族性に起因する亀裂がいかに「クルド（人）問
 題」（Kurdish question/issue、アラビア語でal-mas'ala/al-qaḍīya al-kurḍīya）を発
 生・深刻化させたのかを見たうえで、シリアのクルド民族主義勢力（政党・
 政治組織、政治同盟）を紹介する。第3節では、「クルド問題」やクルド民族
 主義勢力へのB・アサド政権の対応と、同政権下でのクルド民族主義勢力の
 活動を詳しく見る。そして「おわりに」では、権威主義体制という現実のな
 かで、B・アサド政権とクルド民族主義勢力の双方がいかなる政治的課題を
 抱えているのかを考察する。

なお、「クルド問題」とは一般的に、トルコ、イラク、イランといった国々
 におけるクルド民族主義運動の展開と、それによってもたらされる差別・抑
 圧を示す。だが本章で筆者が「クルド問題」という場合、それは単にクルド
 民族性に起因する亀裂や恣意的差別を意味するのではなく、「合法的」な政策
 や法律を通じて「制度化」された「国家が支援、容認する差別」(Human Rights
 Watch [1996: 30]) を指す。

第1節 シリアにおける亀裂構造

シリアにおける亀裂構造は同国社会の文化・地域的、機能的な多様性を客観的・主観的な基礎としている。本節ではまず、こうした多様性がいかなる政治的環境のもとで亀裂をもたらすに至ったのかを概説する。次に、独立（1946年4月17日）から現在に至るまでの亀裂と政治の関係を政治体制の異なる3つの時期に大別して明らかにする。

1. 亀裂の生成

シリアはさまざまな宗教・宗派集団、民族・エスニック集団を抱え、地域的にも多様性に富んだ「モザイク社会」、「モザイク国家」として知られている。宗教・宗派集団に着目すると、イスラーム教のスナ派、アラウィー派、ドゥルーズ派、キリスト教諸派などが暮らしている。また、民族・エスニック集団は、マジョリティを構成するアラブ人の他に、クルド人、アルメニア人（アルメニア正教徒、アルメニア・カトリック）などがいる（表1および図1を参照）。

一方、地域の多様性は主に2つのレベルにおいて顕著である。第1に、ダマスカス、アレッポ、ヒムス、ハマーといった大都市を中心とする地域「くに」（バラド [balad]、複数形はピラード [bilād]）間の文化・慣習や経済生活の違いである。シリアを含む東アラブ地域は「ピラード・アッ＝シャーム」（bilād al-shām、シャーム [今日のシリア、レバノン、ヨルダン、パレスチナ/イスラエル、トルコ南部、イラク北部からなる地域の総称] のくにぐに）と呼ばれるが、この呼称はこうした地域間の差異の存在を端的に表わしている。第2に、経済的機能の違いから生じる都市・農村間の対照で、「くに」を超えるかたち（あるいは細分するかたち）で展開している。この対照はまた、「伝統的」、ないしは「封建的」（iqṭāʾī）な生産様式のもとでの大地主（不在地主）・大商人、

表1 シリアの主要な宗教・宗派集団，民族・エスニック集団の人口比（推計）

宗教・宗派集団	イスラーム教徒	92.31
	スンナ派	76.31
	アラウィー派	12.50
	ドゥルーズ派	3.17
	イスマリーリー派	0.33
	キリスト教徒	7.66
	ギリシャ正教徒	2.67
	ギリシャ・カトリック	1.33
	シリア正教徒	1.17
	シリア・カトリック	0.37
	アルメニア教徒	1.30
	アルメニア・カトリック	0.20
	マロン派	0.25
	ネストリウス派	0.13
	カルディア・カトリック	0.08
	ローマ・カトリック	0.08
	プロテスタント	0.08
	ユダヤ教徒	0.03
民族・エスニック集団	アラブ人	90.22
	クルド人	8.00
	アルメニア人	1.50
	コーカサス人	0.25
	ユダヤ人	0.03

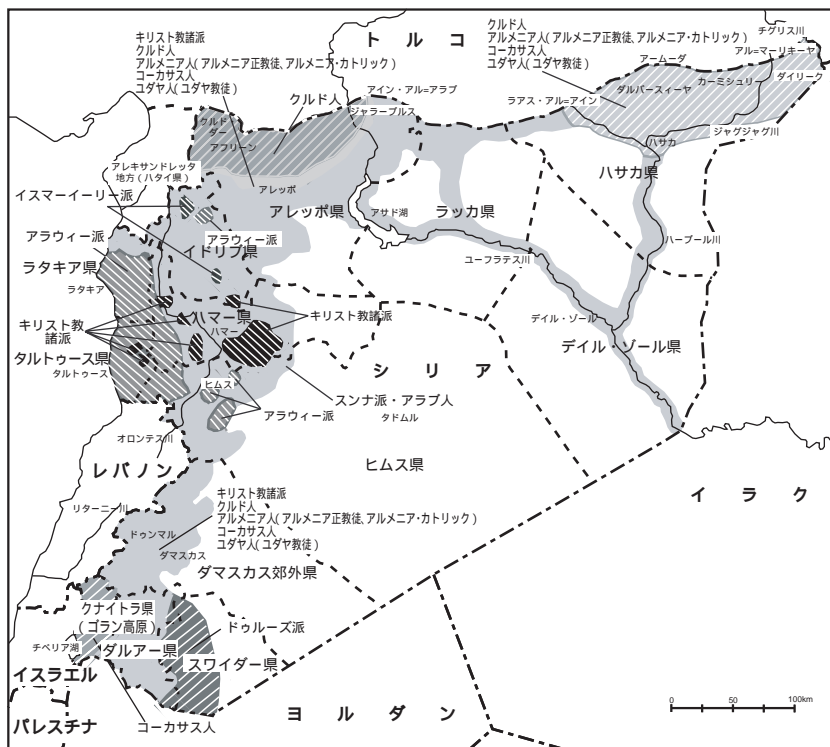
（出所）Collelo [1988: 63], Middle East Watch [1991: 90] をもとに筆者作成。

農民といった階級や，資本主義のもとでの資本家，労働者といった階級の差異とも重なりあっている。

シリアの亀裂構造は，こうした社会の多様性を客観的・主観的な基礎とし，同国の政治的・社会的構成が確定したフランス委任統治（1920～1946年）のもとで生成された。

フランスは，レバノンで宗派主義（*tā'ifiya*）体制を確立したのと同様，シリアにおいても社会の多様性に着目し，その分断を図ることで支配を維持しようとした。「分割統治」とでもいうべきこの支配は，シリアでマジョリティを占めるスンナ派・アラブ人が主導する独立運動の高揚と，委任統治体制を

図1 シリアの主要な宗教・宗派集団，民族・エスニック集団の住み分け



(出所) Boustani and Fargues [1991: 29] Collelo [1988: 62-72] Commins [1996: 47-47, 70] をもとに筆者作成。

脅かすような政治勢力の台頭を抑える目的があったが、具体的には主に2つの施策を通じて推し進められた。第1に、レバント特別軍 (les Troupes Speciales du Levant, シリア国軍の前身) におけるマイノリティ (アラウィー派, ドゥルーズ派, イスマーイーリー派, クルド人, コーカサス人) の優遇であり, 第2に, マイノリティが多く住む地域への自治権の付与である (van Dam [1979: 39], Khoury [1987: 533-534])。このような統治政策が, 宗教・宗派, 民族性・エスニシティ, 地域, 経済的機能, そして階級への帰属という客観的事実 (社会構造・属性上の差異) と主観的な帰属意識 (集団意識や価値) に組織的表現形

表2 シリアにおける主な亀裂

亀裂要因	主な対立項
宗教・宗派	スンナ派対アラウィー派, アラウィー派対ドゥルーズ派など
民族性・エスニシティ	アラブ人対クルド人, アラブ人対アルメニア人など
地域	ダマスカス対アレppo, ヒムス対ハマーなど
経済的機能	都市対農村(地方都市)
階級	大地主・大商人対農民, 資本家対労働者

(出所) 筆者作成。

態を与えることになった。そしてここにシリアの亀裂構造を構成する主要な5つの亀裂(宗教・宗派, 民族性・エスニシティ, 地域, 経済的機能, 階級に起因する亀裂)が確立し, 「固定化」(閉鎖化)されたのである(表2を参照)。

なお, 委任統治下のシリアでは, 西欧列強の恣意的国境確定や亀裂の生成に抵抗するかたちで, アラブ民族主義, シリア民族主義(大シリア主義), マルクス主義, イスラーム主義などが政治化した。これらの超国家イデオロギーは, 亀裂に端を発するすべての社会的対立を超克するだけの万能性を備えてはいなかったが, 国家(state)に合致する国民(nation)概念(国民主義)が未成熟だったシリアにおいて, 国民統合を支える原理(あるいは周辺諸国との連帯やそれらへの内政干渉を正当化する原理)としての役割を果たすようになった。

2. 政治と亀裂の関係の変遷

独立後のシリアは, 議会制民主主義, 一党支配型権威主義, 「権力の二層構造」に基づく権威主義という3つの政治体制を経験してきたが, 亀裂と政治はそれぞれの体制において異なったかたちで結びついてきた。

(1) 議会制民主主義(1946年4月～1963年3月)

独立から1963年3月までの17年間は, 度重なるクーデタ(1949年3月, 8月, 12月, 1951年11月, 1954年2月), 軍事政権(1949年3～8月, 1951年11月～1954

年2月), エジプトとの合邦(1958年2月~1961年9月)によって, 政治的に不安定な状態が続いたものの, 議会制民主主義体制が敷かれた時期であり, そこでの亀裂は政党・政治組織間の対立に反映された。

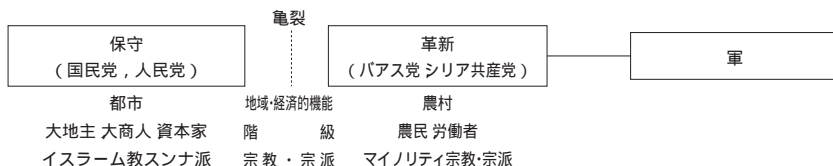
この時期, シリアには大きく分けて2つの政治勢力が存在し, 対立しあってきた。第1の勢力は, 既存の社会・経済体制と政治的優位の維持を望む保守勢力で, 当時政権を交代してきた二大政党の国民党(al-Ḥizb al-Waṭanī)と人民党(Ḥizb al-Sha'b)からなっていた。第2の勢力は, 社会・経済改革(とりわけ農地改革)の実施と政権掌握をめざす革新勢力で, アラブ社会主義バアス党(Ḥizb al-Ba'th al-'Arabī al-Ishtirākī), シリア共産党(al-Ḥizb al-Shuyū'ī al-Sūrī)などからなっていた⁽²⁾。

この2つの勢力の対立は, 保守対革新という政治的志向の違いだけでなく, 宗教・宗派, 地域, 経済的機能(都市・農村), そして階級に起因する亀裂を内包するかたちで展開した。すなわち, 国民党と人民党は, 都市のスナナ派からなる「伝統的」支配階級(大地主, 大商人)や資本家の利益を代表する傾向にあったのに対し, バアス党やシリア共産党は, マイノリティ宗教・宗派が高い割合を占める農村出身の被支配階級(農民, 労働者)を代弁しようとした(図2を参照)。

むろん, 保守勢力と革新勢力はいずれも一枚岩だったわけではない。保守勢力においては, ダマスカスに支持基盤をもつ国民党と, アレッポやハマーを拠点とする人民党が地域的な利害をめぐる対立していた。また革新勢力においては, アラブ統一を優先させようとするバアス党と, マルクス主義における国際主義や非妥協的な階級闘争の原理に依拠するシリア共産党との間にイデオロギー対立が見られた。

なお, 上記の政党以外の政治的アクターとして軍の存在を無視しえない。軍は, 政治的志向と社会的出自の双方において, 革新勢力としての性格を備えており, 1940年代末から1950年代初めにかけてクーデタを繰り返し, 保守勢力の政治的優位の打破と社会・経済改革をめざした。また1950年代半ば以降, バアス党が軍に党勢を拡大し, 両者が連携したことが, バアス革命(1963

図2 議会制民主主義体制における政治と亀裂の関係(1946~1963年)



(出所)筆者作成。

年3月8日)を成功へと導いた。すなわち,議会制民主主義の枠外に置かれた軍という政治アクターの政治への参入が,亀裂を反映した保守対革新の対立を後者の勝利というかたちで決着させるとともに,議会制民主主義体制そのものを崩壊させ,亀裂構造と政党制の関係を奪っていったのである(青山[1995: 51-55, 2005c: 50], Be'eri[1970: 336-337], Hopwood[1988: 31-32, 80-81, 85-89], Seale[1965: 28-31, 37, 39-41, 77-79, 158-159, 176-178], Torrey[1975: 157], van Dam[1979: 40-41]などを参照)。

(2) 一党支配型権威主義体制(1963年3月~1970年11月)

「バアス革命」から現在に至るまでの約半世紀は,権威主義体制が敷かれた時期であるが,このうち1970年11月までの7年間は,バアス党による一党支配のもとで国家運営が行われた点に特徴があり,そこでの亀裂は党内の権力闘争を反映するかたちで顕在化した。

バアス党政権内の権力闘争はまず,アラブ統一と漸進的な社会・経済改革を志向するカウミーユーン(qawmīyūn,民族主義者)と,社会主義の実現を最優先課題に掲げて急進的な改革をめざすクトリーユーン(qutṛīyūn,地域主義者)・軍事委員会(al-Lajna al-ʿAskariya),という2つの陣営の間で繰り広げられた⁽³⁾。「バアス革命」の首謀者を擁する後者の優勢のもとで闘われたこの闘争は,基本的にはイデオロギー対立だったが,経済的機能に起因する亀裂を反映し,前者が大都市を,後者が農村・地方都市を代表していた。

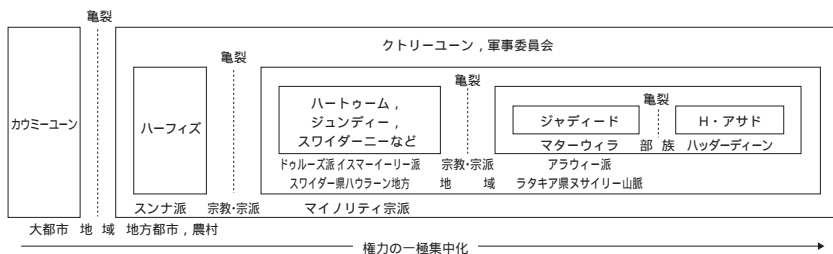
カウミーユーンとクトリーユーン・軍事委員会の権力闘争において後者の

勝利が確定すると、今度は軍事委員会のメンバーどうしが、宗教・宗派、地域に根ざす亀裂を反映するかたちで対立しあった。すなわち、1965年半ばに表面化したアミン・ハーフィズ（Amīn al-Ḥāfiẓ, スンナ派、アレppo市出身）バアス党シリア地域指導部（執行部）書記長とサラフ・ジャディード（Ṣalāḥ Jadīd, アラウィー派、ドウワイル・バアブダ村〔ラタキア県〕出身）同副書記長の権力闘争は、それぞれを支持するスンナ派とマイノリティ宗派の対立といった様相を呈した。また、1966年2月のクーデタでジャディード地域指導部副書記長がハーフィズ同書記長らスンナ派の有力者（およびカウミーユン）を逮捕・国外追放して以降は、マイノリティ宗派・地域間の対立が激化し、1967年半ばから1969年初めにかけて、ドゥルーズ派（サリーム・ハートゥーム〔Salīm Ḥātūm〕地域指導部メンバーら）、イスマーイーリー派（アブドゥルカリーム・ジュンディー〔ʿAbd al-Karīm al-Jundī〕地域指導部民族治安局長ら）、ハウラーン地方出身者（アフマド・スワイダーニー〔Aḥmad Suwaydānī〕参謀総長ら）が次々と粛清された。

これにより、ヌサイリー山地（ラタキア県）出身のアラウィー派による事実上の寡頭制が確立すると、同派の有力者であるジャディード地域指導部副書記長とハーフィズ・アサド（Ḥāfiẓ al-Asad）国防大臣（1971年3月に大統領に就任）が反目し、両者の対立は1970年11月に後者が全権を掌握するまで続いた。ジャディード地域指導部副書記長とH・アサド国防大臣の権力闘争は、厳格な社会主義化政策を断行しようとする前者と、政治と経済における規制緩和をめざす後者の政策上の対立として展開したが、同時にアラウィー派の部族⁴⁾間の亀裂を反映した（アジア経済研究所〔1983: 91-94, 114-123, 136-146〕, Rabinovich〔1972: 66-74, 84-96, 145-157, 180-203〕, van Dam〔1979: 52-54, 83-94〕などを参照）。

以上、バアス党政権内で権力の一極集中化が進められたこの時期、有力者、指導者たちは、「古い亀裂」（old cleavages, Barakat〔1993: 48〕）を駆使して、自らが帰属する宗教・宗派集団、地縁・血縁集団を動員し、政敵の排除や権力の強化をめざしたのである（図3を参照）。

図3 一党支配型権威主義体制における権力闘争と亀裂の関係（1963～1970年）



（出所）筆者作成。

（3）「権力の二層構造」に基づく権威主義体制（1970年11月以降）

1970年11月以降は、H・アサド前大統領とB・アサド大統領のもとで「権力の二層構造」を特徴とする権威主義体制が敷かれた時期である。「権力の二層構造」とは、ムハーバラート（mukhābarāt、内務省、軍、バアス党の管轄下にある諜報機関、秘密警察、武装治安部隊の総称）や軍からなる「真」の権力装置が、大統領の絶対的な指導のもとに政権運営や政策決定を担当する一方で、内閣や人民議会（国会）といった「名目的」権力装置が独断的な支配を隠蔽するために機能するしくみを意味する（Aoyama [2001: 5-23]、青山 [2001a: 14-15]）。このような権力構造が確立したことで、シリアでは「バアス革命」以来続いたバアス党の一党支配が廃止され、複数政党制が復活した。だが、そこで公認されたのは、バアス党と同党が中心となって結成された翼賛的政治同盟、進歩国民戦線（al-Jabha al-Waṭaniya al-Taqaḍdumīya、1972年3月発足）⁵⁾の加盟政党だけであり、それ以外の政党・政治組織は、政治結社としての登録を行うための法的規定（たとえば政党法）がないなかで⁶⁾、「非合法」、「違法」と断定されないまでも⁷⁾、「非公認」の団体とみなされ、その活動を規制された。

「権力の二層構造」のもと、亀裂は2つの目的で利用・操作された。

第1に、権威主義を本質とする支配体制への「民主的」、「多元的」外見の付与である。これは、たとえば、首相、外務大臣、国防大臣のポストをス

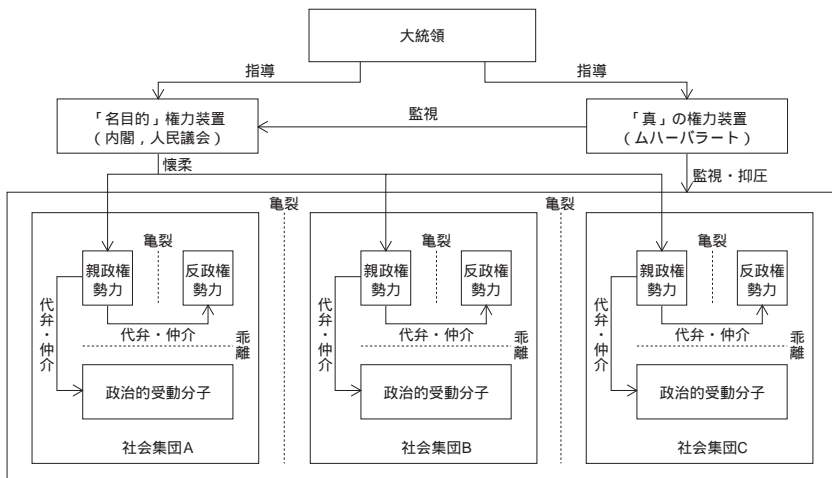
ナ派に、内務大臣、情報大臣のポストをアラウィー派に配分するとともに、ハウラーン地方のキリスト教徒とドゥルーズ派、サラミーヤ地方のイスマリーリー派を入閣させるといった閣僚ポストの宗派主義的配分を通じて行われた(Šādiq[1993: 97-98])。このような網羅的な人材登用によって、政権は自らが主要な亀裂を包含した「民主的」、「多元的」な存在であることを誇示しようとしたのである。

第2に、政権を脅かす可能性のある社会集団内の亀裂の強調と同集団の分断を通じた支配力の相対的な強化と政治的安定性の確保である。たとえば、H・アサド政権は、「バアス革命」以降、政治的にも経済的にも疎外されてきた「伝統的」支配階級のうち、ダマスカスの大地主、大商人を懐柔し、「インフィターフ」(infitāḥ, 門戸解放)政策に協力させることで(Lawson[1988: 586])、他の都市(地域)との格差を助長した。階級に起因する亀裂と地域に基づく亀裂を「交差」させるこうした策は、「伝統的」支配階級の勢力を分散・低下させるのに寄与しただけではなかった。「伝統的」支配階級を親政府勢力と反政府勢力に分裂させた政権は、前者に後者(ないしは階級全体)の要求を代弁させたり、後者との交渉において前者を仲介役とすることで、不満の鬱積を抑止してきたのである(図4を参照)。

なお、権威主義支配の隠蔽と権力基盤の拡大・強化を目的とした以上のような試みによっても、政権に対する不満は完全には抑えられず、シリア国内では反政府運動がしばしば発生したが、それもまた亀裂構造と無関係ではなかった。例えば、1970年代半ばから1980年代初めにかけてのシリア・ムスリム同胞団(Jamā'a al-Ikhwān al-Muslmīn fī Sūrīya)とH・アサド政権の対決は、宗教・宗派、地域、経済的機能、階級に起因する亀裂を反映し、前者がスンナ派、都市(とりわけシリア中北部)、「伝統的」支配階級および資本家を、後者がアラウィー派、農村(とりわけヌサイリー山脈)、被支配階級をそれぞれ代表しているとみなされた(青山[1994: 127-134])。

権威主義体制を敷く国(とりわけ議会制民主主義を経験した後に権威主義体制に至った国)では、亀裂構造が破壊され、亀裂と政治の結びつきが失われた

図4 「権力の二層構造」のもとでの亀裂の利用・操作（1970年以降）



（出所）筆者作成。

と捉えられがちであった（本書9ページを参照）。しかし、シリアの事例から明らかのように、政党制が十分機能しない政治体制のもとでも亀裂構造は権力闘争や動員などの過程で政治に作用しているのである。

第2節 「クルド問題」とクルド民族主義勢力

第1節2では、独立後のシリアの政治に、宗教・宗派、地域、経済的機能、階級に根ざす亀裂が作用してきたことを明らかにした。だが、このことは民族性に起因する亀裂、とりわけ本章の主要な関心事であるクルド民族性に起因する亀裂と政治の無関係の意味するものではない。そこで本節では、クルド民族性に起因する亀裂が原因となって発生した「クルド問題」と、この亀裂を体現するかたちで興隆したクルド民族主義勢力に着目する。

なお、民族性の差異に基づく亀裂は、通常であれば、アラブ人、クルド人などといった対立項を表出させるが、アラブ民族主義を国是とするシリアで

は、アラブ民族性を体現する国家対クルド人（ないしはクルド民族主義勢力）といった様相を呈する。非アラブ人（クルド人）の民族性がシリア政治において意味をなすこうした特殊事情を踏まえ、本章では単に「民族性に起因する亀裂」とするのではなく、あえて「クルド民族性に起因する亀裂」という表現を用いる。

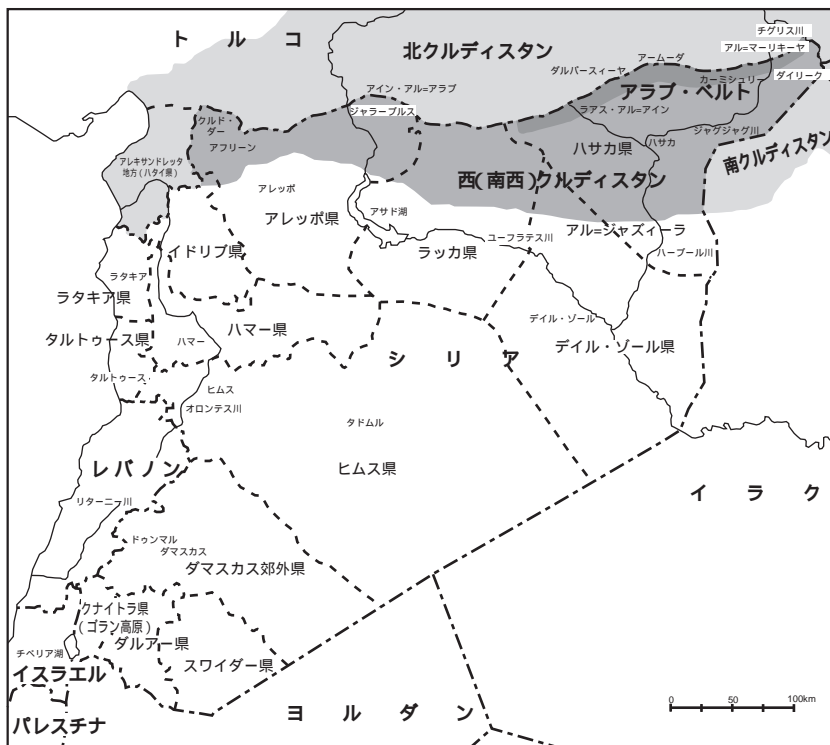
1. 「クルド問題」の発生と深刻化

シリアのクルド人は、総人口の約8%⁽⁸⁾を占める同国最大のマイノリティ民族・エスニック集団である。彼らは、ジャバル・アル＝アクラード（クルド・ダー）周辺、ジャズィーラ地方、ダマスカス市およびその郊外（ドゥンマル市近郊のワーディー・アル＝マシャーリーウ）などに集住している。このうち、ダマスカス市（およびその郊外）を除く一帯は西クルディスタン、ないしは南西クルディスタンと総称され、その面積は約1万8000平方キロメートルにおよぶ（表1、図5、‘Abbūd [2004], Gunter [2004: 105], Jam‘īya Ḥuqūq al-Insān fī Sūrīya [2003: 5], Mannā [2004: 6], McDowall [2000: 466-467], Nazdar [1980: 211-213], Ramaḍān [n.d.] を参照）。

独立後のシリアでは、委任統治への抵抗を通じて政治化した超国家イデオロギーのひとつであるアラブ民族主義が国となった。だが、アラブ民族主義は、宗教・宗派や地域の多様性に根ざす社会的対立の超克をめざすというその本分とは裏腹に、非アラブ人を政治的・社会的・経済的に疎外する性向をもっていた。クルド民族性に起因する亀裂は、まさにこうしたイデオロギー的性向のもとで強調され、1940年代と1950年代にクルド人への恣意的差別を誘発し、1960年代以降、それが「制度化」することで「クルド問題」となった。

（1）恣意的差別の誘発（独立～1950年代末）

図5 西(南西)クルディスタン



(出所) Badrkhān [2003] <http://www.yekiti.de/kurdistan.htm> (2003年3月アクセス) をもとに筆者作成。

議会制民主主義体制が敷かれた1940年代と1950年代、クルド民族性に起因する亀裂は、宗教・宗派、地域、経済的機能、階級に起因する他の主要な亀裂とは異なり、政党制に直接反映されなかった。だが、それは以下2つの政治的出来事、ないしは政治的变化を受けるかたちでクルド人への反感や恣意的差別を誘発し、政治に影を落としていった。

第1に、委任統治時代のレバント特別軍におけるマイノリティ優遇措置の結果として軍の要職を占めるようになったクルド人士官の政治への干渉である。先述の通り、「伝統的」支配階級出身の保守勢力が主導権を握った独立後

のシリアにおいて、軍は革新勢力とともに被支配階級を代弁する存在として政治に関与し、数度にわたってクーデタを実行したが、こうした動きを主導したのが他ならぬクルド人士官だった。すなわち、1949年3月から1951年11月にかけて実行された軍事クーデタの首謀者、フスニー・ザイーム (Ḥusnī al-Zaʿīm, 1949年3月のクーデタの首謀者) 大佐、サーミー・ヒンナーウィー (Sāmī al-Ḥinnāwī, 1949年8月のクーデタの首謀者) 准将、アディーブ・シーシャクリー (Adīb al-Shīshaklī, 1949年12月と1951年11月のクーデタの首謀者) 大佐は、いずれも「クルドの出自」(van Dam [1979: 42]) をもっていた。クルド人士官の政治への関与は、1954年2月に民政が回復したことで幕を閉じたが、クーデタによってもたらされた政治的不安定は「クルド軍事政権」(McDowall [2000: 471]) の結果との批判を浴び、シリア社会内にクルド人への反感を助長していった。

第2に、シリア国内におけるアラブ民族主義の高揚である。この動きは、1952年のエジプト7月革命によるガマール・アブドゥンナーシル (Jamāl ʿAbd al-Nāṣir, 以下ナセル) 政権の発足を機に一気に加速し、1958年2月から1961年9月にかけて、シリアはエジプトと合邦し、アラブ連合共和国を構成するに至った。そして、アラブ民族統一に向けたこの政治的流れのなかで、クルド人に対する差別が激しさを増していった。たとえば、1950年代半ばには、クルド語のレコードが回収・破棄され、その所有者が逮捕される事件が発生した。またアラブ連合共和国成立直後にはクルド語の出版物が発禁処分となった。さらに1960年11月にはアームーダ市の映画館が「焼き討ち」に遭い、283人のクルド人（そのほとんどが小学生）が殺害されるといった事件が起きた (Hurewitz [1969: 153], McDowall [1992: 122, 2000: 471-472], van Dam [1979: 48], *Yekîti* [2000a])。

(2) 差別の「制度化」

「クルド問題」は、このような恣意的差別が「制度化」されることで発生・深刻化したのが、その根幹をなしたのが1960年代に実施された2つの施策、す

なわち「例外的統計」(al-iḥṣā' al-istithnā'ī)と「アラブ・ベルト」(al-ḥizām al-'arabī) 構想であった。

「例外的統計」は、分離政権 (1961年 9月 ~ 1963年 3月) 下の1962年 8月23日に施行された1962年法律第93号に従って、同年10月 5日にハサカ県で実施された人口統計の再調査を意味する。当時のハサカ県における急激な人口増加を近隣諸国からのクルド人の密入国と不法滞在の結果と断じ、「住民台帳の純化」(Human Rights Watch [1996: 38]) を目的に実施されたこの調査では、約12万のクルド人が「外国人」(ajnabī) , ないしは「マクトゥーム」(maktūm , 「戸籍に記載されていない [者]」[maktūm al-qayd] , 「住民台帳に登録されていない [者]」[ghayr musajjal fī al-sijillāt] を意味する) とみなされ、シリア国籍を剥奪された。現在、国籍をもたないクルド系住民の数は27万5000人から28万人に達するとされ、うち約20万人が「外国人」、残る 7万5000人から 8万人が「マクトゥーム」と推計されている(青山[2005c: 52-54] , Ḥamīdī[2004d] , Human Rights Watch [1996: 12, 15, 40] , Jam'īya Ḥuqūq al-Insān fī Sūriya [2003: 5-6] , McDowall [1992: 122-123] , Nazdar [1980: 216])。

一方、「アラブ・ベルト」構想は、1960年代半ばにバアス党政権によって策定され、ラアス・アル＝アイン市西部からイラク国境に至る全長約275キロメートル、幅約10キロメートルから15キロメートルの地域(図5を参照)に住むクルド人農民を追放し、アラブ人農民に国営のモデル農村を建設させることを目的とした。この構想は、1960年代後半と1970年代前半に実施され、数万人のクルド人が土地没収と強制移住の対象となった。また、同構想の一環として、ハサカ県やアレppo県でクルド語起源の市・村名のアラビア語名への変更や、公の場でのクルド語による会話の禁止などが行われた(青山[2005a: 54-57] , Human Rights Watch [1996: 12-13, 27-30, 51-56] , Mannā' [2004: 7- 8] , McDowall[1992: 123] [2000: 475-477] , al-Munāḍil [1966] , Nazdar [1980: 217-218] , Sarūjī [2004] , <http://home.c2i.net/yekiti/kurdishhistory.htm> [2003年 3月アクセス])。

クルド人に対する恣意的差別が分離政権とバアス党政権のもとで「制度化」

された背景には、主に2つの要因があったと考えられる。第1に、アラブ民族主義への献身を具体的な政策に反映させる必要の高まりである。とりわけ、エジプトとの合邦を解消して発足した分離政権は、国内外からの「反動的」との批判をかわすべく「例外的統計」を断行し、自らがアラブ民族主義の理念に「忠実」であることを示そうとした。第2に、イラクやトルコのクルド民族主義運動が波及し、シリア内政を不安定化させることへの警戒感である。これはバアス党政権下で切実な問題となった。たとえば、「アラブ・ベルト」構想は、クルディスタン民主党(al-Ḥizb al-Dīmuqrāṭī al-Kurdistānī, 英語名 Kurdistan Democratic Party, 略称KDP)の武装闘争への対応に苦慮するバアス党政権下のイラクを「教訓」として、「民族国家建設の準備を進めるクルド人」(*al-Munāḍil* [1966])の「脅威」を排除するという口実のもとに実施された。また、1980年代のクルド語の使用規制強化などは、H・アサド政権の庇護のもと、シリアとレバノンを拠点に対トルコ武装闘争を行っていたクルディスタン労働者党(Partiya Karkeren Kurdistan, 略称PKK)の存在が、シリア国内のクルド人の民族感情を刺激し、反政府運動の高揚を招くことを懸念して行われたという一面もあった(青山[2005c: 52, 57-58])。

2. 主なクルド民族主義政党・政治組織、政治同盟

「クルド問題」が、クルド民族性に起因する亀裂と恣意的差別の「制度化」の結果として生じたのに対し、この亀裂を積極的かつ自発的に政治の場で表現してきたのがクルド民族主義勢力であった。

シリアのクルド民族主義勢力は亀裂構造が形成されたフランス委任統治時代に生まれ、クルド人に対する恣意的差別が激化した1950年代後半にシリア・クルディスタン民主党(al-Ḥizb al-Dīmuqrāṭī al-Kurdistānī fī Sūriyā)を結成(1957年6月に結成、その後1958年にシリア・クルド民主党〔アラビア語名al-Ḥizb al-Dīmuqrāṭī al-Kurdi fī Sūriyā, クルド語名Partiya Demokrat ya Kurdi li Sûriyê)に改称)することで、政治活動を本格化させた。しかし、彼らはB・アサド政権

が発足するまでの約40年間、主に2つの理由により低迷を続けた。

第1に、歴代政権、すなわちナセル政権（アラブ連合共和国）、分離政権、バース党政権、そしてH・アサド政権による活動規制である。クルド民族主義勢力は、ナセル政権下の1960年8月と分離政権下の1961年12月にシリア・クルド民主党のヌールッディーン・ザーザー（Nūr al-Dīn Zāzā）党首らを逮捕されるなど、活動を本格化した直後から度々大規模な弾圧に曝された（Kinnane [1964: 44], Mannā' [2004: 7], McDowall [1992: 122]）。また、戒厳令（1963年3月8日第2軍事令）が敷かれたバース党政権下では、「宗派主義的・教条主義的ショーヴィニズム」を喚起し、「シリアの国土の分割と外国への割譲」をめざす「秘密結社」とみなされた（青山 [2005b: 60]）。むろん、こうした弾圧はクルド民族主義勢力に限られたものではなかったが、「例外的統計」や「アラブ・ベルト」構想といった「制度化」された差別のもと、彼らの活動が他の反政府勢力にも増して困難をともなっていたことは容易に想像がつく。

第2に、クルド民族主義勢力内での対立・分裂である。1960年代以降のクルド人に対する差別・抑圧の「制度化」と歴代政権による弾圧は、彼らの結束を強化することも、政治的プレゼンスを増大させることもなく、以下のような争点をめぐる内部対立を助長した（青山 [2005b: 60-61]）。

- 思想潮流をめぐる対立 労働者・農民に支持基盤を置き、クルディスタンの解放・独立・統一をめざす「左派」と、大地主や宗教指導者の指導を認め、シリア国内での政治的・文化的自治をめざす「右派」の対立。この対立は、経済的機能や階級に起因する亀裂だけでなく、第2章第2節で取り上げられている「世俗・宗教」亀裂を反映した。
- 政権との関係をめぐる対立 政権との対話・交渉を通じて政治参加を実現するか、非妥協的な抵抗運動を通じて体制転換をめざすのかをめぐる対立。
- 隣国のクルド民族主義勢力との協力関係をめぐる対立 PKK, KDP, クルディスタン愛国連盟（al-Ittihad al-Waṭanī al-Kurdistanī, 英語名Patriotic Union of Kurdistan, 略称PUK）などとの協力関係の是非をめぐる対立。

●指導者どうしの主導権争い。

こうした対立の結果、シリアのクルド民族主義勢力は分裂を繰り返し、政権に対する抵抗力を相対的に低下させていった。現在(2006年1月現在)、クルド民族主義勢力は以下に列記した15の政党・政治組織と2つの政治同盟(それらはいずれも「非公認」組織)からなっている。それらはみな、クルド民族性に起因する亀裂を体現するかたちで、「クルド国民運動」(al-ḥaraka al-waṭaniya al-kurdiya)の一翼を担っていることを自認している。また、シリアという既存の国家を認め(クルディスタンの解放・独立・統一をあからさまに標榜せず)、その枠内で「クルド問題」の解決をめざす点で共通している(青山[2005b, 2006a, 2006b], 図6を参照)⁹⁾。しかし、後述するように、B・アサド政権への対応、他のイデオロギー・政治潮流に属す反政府組織との関係、さらにはクルド民族主義と「民主化」の関係づけをめぐる意見・立場を異にしている。

(1) 政党・政治組織

- シリア・クルド民主党(アル・パールティー)(アラビア語名al-Ḥizb al-Dīmuqrāṭī al-Kurdī fī Sūriyā (al-Bārtī), クルド語名Partiya Demokrat ya Kurd li Sūriyê (al Partî)) ナスルッディーン・イブラーヒーム(Naşr al-Dīn Ibrāhīm)派 シリア・クルド民主党の後身。
- シリア・クルド民主党(アル・パールティー)ムハンマド・ナズィール・ムスタファー(Muḥammad Nadhīr Muṣṭafā)派 シリア・クルド民主党の後身, シリア・クルド民主党(アル・パールティー)イブラーヒーム派から分離(分離時期不明)。
- シリア・クルド左派党(アラビア語名al-Ḥizb al-Yasārī al-Kurdī fī Sūriyā, クルド語名Partiya Çep a Kurd li Sūriyê)ハイルッディーン・イブラーヒーム(Khayr al-Dīn Ibrāhīm)派 1965年8月にシリア・クルド民主党から分離。
- クルド・シリア民主党(アラビア語名al-Ḥizb al-Dīmuqrāṭī al-Kurdī al-Sūrī,

1957
シムア・クリス



シリア・クルド進歩民主党（アラビア語名al-Ḥizb al-Dīmuqrāṭī al-Taqaddumī al-Kurdī fī Sūriyā、クルド語名Partiya Dêmoqrati Pêşverû Kurd li Sûriyê）アブドゥルハミード・ダルウィーシュ（‘Abd al-Ḥamīd Darwīsh）派 1970年8月にシリア・クルド民主党から分離（1977年に現在の党名に改称）。シリア・クルド進歩民主党アズィーズ・ダーウド（‘Azīz Dāwud）派 1980年代初めにシリア・クルド進歩民主党ダルウィーシュ派から分離。シリア・クルド・イエキーティー党（アラビア語名Hizb Yakiṭī al-Kurdī fī

- シリア・クルド進歩民主党（アラビア語名al-Ḥizb al-Dīmuqrāṭī al-Taqaaddumī al-Kurdī fī Sūriyā，クルド語名Partiya Dêmoqrataî Pêşverû Kurd li Sûriyê）アブドゥルハミード・ダルウィーシュ（‘Abd al-Ḥamīd Darwīsh）派 1970年8月にシリア・クルド民主党から分離（1977年に現在の党名に改称）。
- シリア・クルド進歩民主党アズィーズ・ダーウド（‘Azīz Dāwud）派 1980年代初めにシリア・クルド進歩民主党ダルウィーシュ派から分離。
- シリア・クルド・イエキーティー党（アラビア語名Hizb Yakiṭī al-Kurdī fī

Sûriyā, クルド語名Partiya Yekîti ya Kurd li Sûriyê) 1992年から1993年にかけて結成

- シリア・クルド民主統一党 (イエキーティー) (アラビア語名Ḥizb al-Waḥda al-Dīmuqrāṭī al-Kurdī fī Sūriyā (Yakīti), クルド語名Partiya Yekîti ya Demokrat ya Kurd li Sûriyê (Yekîti)) シリア・クルド・イエキーティー党が発足する直前に離反した面々が1993年に結成。
- シリア・クルド国民民主党 (アラビア語名al-Ḥizb al-Dīmuqrāṭī al-Waṭanī al-Kurdī fī Sūriyā) シリア・クルド進歩民主党ダーウド派の離反者が結成 (結成時期不明)。
- シリア・クルディスタン民主パールティー (アラビア語名Bārtī Dīmuqrāṭī Kurdistan Sūriyā, クルド語名Partiya Democrat a Kurdistanê - Sûriyê) 結成時期不明。
- シリア民主連合党 (アラビア語名Ḥizb al-Ittiḥād al-Dīmuqrāṭī fī Sūriyā, クルド語名Partiya Yekîti ya Demokratîk) 2003年9月にPKKの元メンバーが結成。
- クルド・シリア民主合意 (アラビア語名al-Wifāq al-Dīmuqrāṭī al-Kurdī al-Sūrī) 2004年9月にPKKの元メンバーが結成。
- 西クルディスタン亡命政府 (アラビア語名Ḥukūma Gharb Kurdistan fī al-Manfā) 2004年4月に発足。2006年1月にシリア・クルディスタン民主変革運動 (Ḥaraka al-Taghyīr al-Dīmuqrāṭī al-Kurdistanī fī Sūriyā) に改称。
- シリア・クルド・アーザーディー党 (アラビア語名Ḥizb Āzādī al-Kurdī fī Sūriyā) 2005年5月に以下の2党が合併し結成。
 - シリア・クルド左派党ハイルッディーン・ムラード (Khayr al-Dīn Murād) 派 1965年8月にシリア・クルド民主党から分離。
 - シリア・クルド人民連合党 (アラビア語名Ḥizb al-Ittiḥād al-Shaʿbī al-Kurdī fī Sūriyā, クルド語名Partiya Hevgirtina Gelê Kurd li Sûriyê) 1975年にシリア・クルド左派党から分裂 (1980年8月に改称)。
- シリア・クルド・ムスタクバル潮流 (アラビア語名Tayyār al-Mustaqbal al-

Kurdî fi Sûriyâ) 2005年5月に結成。

(2) 政治同盟

- シリア・クルド民主同盟 (アラビア語名 al-Taḥāluf al-Dīmuqrāṭī al-Kurdî fi Sûriyā, クルド語名 Hevbendiya Demokrat a Kurd li Sûriyê) 1992年2月に発足, 加盟政党 (加盟年, 脱退年) は以下の通り。
 - シリア・クルド民主党 (アル・パールティー) イブラーヒーム派 (1992年2月に加盟)。
 - シリア・クルド進歩民主党 ダルウィーシュ派 (1994年に新規加盟)。
 - シリア・クルド民主統一党 (イエキーティー) (1999年に新規加盟)。
 - シリア・クルド人民連合党 (1992年2月に加盟, 2002年6月に脱退)。
 - クルド・シリア民主党 (1992年2月に加盟, 2003年12月に脱退)。
 - シリア・クルド左派党 ムラード派 (1992年2月に加盟, 2005年5月にシリア・クルド・アーザーディー党に発展解消)。
- シリア・クルド民主戦線 (アラビア語名 al-Jabha al-Dīmuqrāṭīya al-Kurdīya fi Sûriyā, クルド語名 Bera Demokrat a Kurd li Sûriyê) 2001年3月に発足, 加盟政党 (加盟年, 脱退年) は以下の通り。
 - シリア・クルド民主党 (アル・パールティー) ムスタファー派。
 - シリア・クルド左派党 イブラーヒーム派。
 - シリア・クルド進歩民主党 ダーウド派。
 - シリア・クルド国民民主党。
 - シリア・クルド・アーザーディー党 (2005年5月に加盟, 2006年3月に脱退)。

第3節 B・アサド政権下でのクルド民族主義勢力の活動

B・アサド政権の発足は, それまで低迷を余儀なくされてきた反政府勢力

を再活性化させたが、その背景には主に3つの要因があった。第1に、卓越した指導力で知られた前大統領とは対照的に、B・アサド大統領が権威主義体制を牽引するだけの政治的手腕を欠いているとみなされたこと、第2に、前政権との違いを強調しようとした大統領が改革志向をもって支配を正統化しようとしたこと、そして第3に、イラク戦争（2003年3月）後のアメリカによるシリア・パッシング（イラク復興への非協力やレバノンの「占領支配」・内政干渉への批判）に乗じるかたちで、政権に改革を迫ろうとする気運（「ネオリベラリーユーン」[neo-lībrālīyūn, 新自由主義者]の気運）が高まったこと、である（青山[2005d: 50]、島崎[2005]を参照）。

クルド民族主義勢力は、これらの要因に促されるかたちで政治活動を本格化させ、国内の有識者が主導した「ダマスカスの春」(rabī‘ dimashq)⁽¹⁰⁾が完全に挫折した2002年半ば以降、シリアの反政府運動のなかで大きなウェートを占めるようになった。以上を踏まえ、本節ではまず、改革志向を全面に打ち出すB・アサド政権の対クルド政策、すなわち「クルド問題」やクルド民族主義勢力への対応を、前政権との比較を通じて明らかにする。そのうえで、クルド民族主義勢力がシリア国内でどのような活動を展開したのかを具体的に見る。

1. B・アサド政権の対クルド政策

B・アサド大統領は就任直後から、進歩国民戦線の活性化や民間メディアの育成など、「多元主義」の拡充に向けた政策を次々と策定・実施し、自らの改革志向を誇示しようとした（青山[2002: 43-51, 2005a: 29-37]などを参照）。こうした政治姿勢は、B・アサド政権の対クルド政策に前政権とは異なる3つの新たな特徴を付与した。

第1の特徴は、「クルド問題」解決に向けた積極的な意思表示である。2002年8月、B・アサド大統領は、シリアの国家元首としては44年ぶりとなるハサカ県への公式訪問を行い、地元のクルド人有力者らを前に次のように発言

した。

「ここ[ハサカ県]には早急に解決しうる多くの問題がある。提起されているにもかかわらず 検討されていない多くの問題がある。[これらの問題は] 直ちに検討されるだろう。そして検討の準備が整えば [問題への対応は] 実行段階に移されるだろう……。クルド人は我々の兄弟であり、我々は彼らを他のシリア国民と等しく見ている。我々と彼らの文明はひとつである」(*Şawt al-Akrād* [2002])。

また、2005年6月に開催されたバアス党第10回シリア地域大会(党大会)では、「国籍を剥奪されたクルド人の権利回復」(*al-Thawra* [2005])という提言が採択され、「クルド問題」の解決が政策目標に掲げられた。これらの発言や提言は、「アラブ・ベルト」構想の推進などを通じて「クルド問題」を深刻化させてきたH・アサド政権の姿勢とはきわめて対照的であった。

第2の特徴は、クルド民族主義勢力の活動への部分的な規制緩和である。H・アサド前大統領がクルド民族主義勢力を含む反政府勢力を徹底的に弾圧してきたのは異なり(Human Rights Watch[1993: 335 ,1996: 33-34], Mannā[2004: 8]などを参照), B・アサド大統領は、自らが設定した4つの「レッド・ライン」(*khatt aḥmar*) (1)政権の存在そのものを否定しない、(2)政権が進める改革を先取りするような言動を控える、(3)在外勢力や外国と結託しない、(4)地下活動を行わない、という4つの条件(青山 [2005a: 42], 島崎 [2005: 11])

に抵触しない限りにおいて、その活動を黙認していった。そうすることで、反政府勢力を無力なまま延命させ、「多元主義」拡充という施政方針に寄与させようとしたのである(青山 [2005a: 55-56])。

なお、反政府勢力を封じ込めるためのこのような施策の一環として、B・アサド政権がその制定をめざしてきたのが、現下の法制度のもとで「非公認」とみなされる反政府勢力の「公認」(「泡沫野党」としての地位、ないしは進歩国民戦線新規加盟政党候補としての地位の付与)を目的とした政党法である。2005年11月に作成された法案において、「[政党法の認可を受ける] 政党は人種、宗教、部族に依拠してはならない」(*Ḥaydar* [2005])という基本前提が再確

認められたことを踏まえると、この法はクルド民族主義勢力の「非合法」化をもたらす可能性をもっている。しかし、2005年5月初め、アラブ民族主義勢力とマルクス主義勢力の参加しか認めていなかった進歩国民戦線⁽¹¹⁾に、シリア民族主義を奉じるシリア民族社会党 (al-Ḥizb al-Sūrī al-Qawmī al-Ijtīmāʿī) イサーム・マハーイリー (ʿIṣām al-Maḥāyirī) 派が加盟した事例を鑑みるに、こうした法律や決定の適用は厳格ではなく、B・アサド政権は政党法を通じてクルド民族主義勢力を牽制・無力化していくものと思われる。

第3の特徴は、クルド民族性に起因する亀裂の強調を回避するような人材登用術への依存度の低下である。H・アサド前大統領は、クルド民族主義勢力を弾圧する一方で、クルド民族主義以外のイデオロギー・政治潮流を介してクルド人を懐柔しようとした。その「窓口」になったのがシリア共産党と宗教界（イスラーム教界）である。シリア共産党は結党（1924年）以来、宗教・宗派集団や民族・エスニック集団への帰属の超克をめざすマイノリティ出身の有識者の支持を受けてきたが、1932年にダマスкас出身のクルド人、ハリド・バクダーシュ (Khālid Bakdāsh) が書記長に就任したのを機に、「伝統的・社会的チャンネル」(van Dam [1979: 44]) を駆使して、クルド人を多く入党させ、党勢を拡大していった(青山[2003: 85-88], Tachau[1994: 525-527])⁽¹²⁾。そしてこのシリア共産党を進歩国民戦線の加盟政党として懐柔することで、H・アサド前政権はクルド人を包摂しているというイメージを獲得したのである。同様の効果は、宗教界の高位に、アフマド・カフタールー (Aḥmad Kaftārū, 共和国ムフティー [muftī]) やムハンマド・サイード・ラマダーン・ブーティー (Muḥammad Saʿīd Ramaḍān al-Būṭī, ダマスкас大学シャリーア学部長) といったクルド人を登用することでも得られていった⁽¹³⁾。しかし、B・アサド政権は、こうした亀裂操作を積極的に行わず、「クルド問題」解決への意思表示やクルド民族主義勢力の活動への部分的規制緩和に重きを置いたのである。

以上、B・アサド政権の対クルド政策を見ると、同政権が、「クルド問題」の黙殺やクルド民族主義勢力の弾圧、さらには亀裂操作など、権威主義体制

に特有ともいうべき施策に依拠するのではなく、亀裂そのものを容認するようなスタンスをとることで、統治の正統性と支配の安定性を確保しようとしていることが明らかである。

2. B・アサド政権下におけるクルド民族主義勢力の動静

改革志向によって彩られたB・アサド政権の対クルド政策は、クルド民族主義勢力の再活性化を促した。彼らは、「ダマスカスの春」の弾圧によって勢力を失った有識者にとって代わるかたちで台頭し、2002年半ば以降、活発に反政府運動を行うようになった(クルド民族主義勢力の主な活動については表3を参照)。だが、その活動は路線対立や共同戦線を模索する試みの失敗などにより必ずしも順調には進まなかった。

(1) 路線対立

クルド民族主義勢力内の路線対立は主に2つの争点をめぐって顕著であった。

第1の争点は、B・アサド政権への対応をめぐる問題であり、政権に対して強い調子で改革を迫ろうとする陣営(急進派)と、政権との対決を回避し、国内での活動公認(ないしは黙認)をめざす陣営(穏健派)が対立した。

急進派は、B・アサド政権に対する示威行動(2002年12月10日のデモ)を最初に実行したシリア・クルド・イエキーティー党を中心とし、シリア・クルド・アーザーディー党(そしてその前身のシリア・クルド人民連合党とシリア・クルド左派党ムラード派)、シリア・クルド民主統一党(イエキーティー)、シリア民主連合党、クルド・シリア民主合意、シリア・クルド・ムスタクバル潮流からなる。一方、穏健派は、B・アサド政権のもとで最初に公然活動(2002年6月半ばの祝典)を再開したシリア・クルド進歩民主党ダルウィーシュ派が主導的役割を担い、シリア・クルド民主党(アル・パールティー)イブラーヒーム派、クルド・シリア民主党、そしてシリア・クルド民主戦線のシリア・

表3 クルド民族主義勢力の主な活動（2000～2005年）

年月日	主な活動
2000年12月10日	シリア・クルド・イエキーティー党政治委員会メンバーのマルワーン・ウスマーン（Marwān ‘Uthmān）がムハンマド・アミン・ムハンマド（Muḥammad Amīn Muḥammad, 作家）とともに、カーミシュリー市でジェラーデト・ベドウルハーン文化会議（Muntadā Celadet Bedirxan al-Thaqāfī）を結成。
2002年6月半ば	シリア・クルド進歩民主党ダルウィーシュ派が、カーミシュリー市でシリア・クルディスタン民主党結成45周年の祝典を主催。会場にはH・アサド前大統領とB・アサド大統領の写真が飾られ、ムンズイル・ムーサッリー（Mundhir al-Mūṣallī）人民議会副議長、ムハンマド・マンスーラ（Muḥammad Maṣṣūra）政治治安部（ムハーバラートのひとつ）総務次長（対クルド政策を担当）ら、B・アサド政権高官・関係者が参列。
2002年10月初め	シリア・クルド進歩民主党ダルウィーシュ派がワーディー・アル＝マシヤーリーウでフォーラムを主催。シリア共産党ユースフ・ファイサル（Yūsuf Fayṣal）派の代表らを招き、シリアのクルド人の現状について討論を行う。このフォーラムでシリア・クルド進歩民主党ダルウィーシュ派のファイサル・ユースフ（Fayṣal Yūsuf）中央委員会メンバーは「クルド国家の樹立[をめざす思想は]……幻想に過ぎず、何らの正当性もない」と発言。
2002年11月22日	シリア・クルド進歩民主党ダルウィーシュ派の主導のもと、シリア・クルド民主同盟がカーミシュリー市で円卓会議を開催し、シリア共産党ファイサル派、シリア民族社会党マハーイリー派の代表らを招き、「クルド人問題」などを議論。この会議でシリア・クルド進歩民主党ダルウィーシュ派のダルウィーシュ書記長は、「私は狭量な民族主義的立場からクルド人の現状に関する問題を提起しない。なぜなら、それはクルド人だけでなく、シリアという祖国全体にかかわる問題だからである」と発言。
2002年12月10日	シリア・クルド・イエキーティー党が、世界人権の日にあわせてダマスカス市内の人民議会議事堂前でデモを実施。100人以上を動員し、クルド人民の民族的アイデンティティの承認、クルド語・クルド文化への規制の解除などを要求。デモを指導した党政治委員会メンバーのウスマーンとハサン・サーリフ（Ḥasan Ṣalīḥ）は12月15日に逮捕され、2004年2月22日、国家最高治安裁判所で禁固14ヵ月を宣告される。
2003年2月後半	シリア・クルド民主同盟、シリア・クルド民主戦線、シリア・クルド人民連合党、シリア・クルド・イエキーティー党が第8期人民議会選挙への参戦をめざしたが、最終的にはボイコットを宣言。
2003年6月初め	シリア・クルド民主同盟、シリア・クルド民主戦線、シリア・クルド人民連合党、シリア・クルド・イエキーティー党が統一地方選挙のボイコットを宣言。

2003年 6月25日	シリア・クルド・イエキーティー党, シリア・クルド人民連合党, シリア・クルド民主統一党 (イエキーティー), シリア・クルド左派党ムラード派が, 世界子供の日に合わせてダマスカス市内のユニセフ事務所前でデモを実施。100人余りを動員し, 学校でのクルド語教育の解禁とクルド語の使用許可などを要求。これに対して治安当局はデモを強制排除するとともに, 指導者7人を逮捕。なお, シリア・クルド進歩民主党ダルウィーシュ派, シリア・クルド民主党 (アル・パールティー) イブラーヒーム派, クルド・シリア民主党, シリア・クルド民主戦線加盟4党派は, 予定していたデモへの参加を取りやめた。
2003年 8月上旬	シリア・クルド進歩民主党ダルウィーシュ派が国民対話集会を開催。バアス党の代表らを招き, 「クルド問題」について討論を行う。
2003年10月 5日	シリア・クルド・イエキーティー党, シリア・クルド人民連合党, シリア・クルド民主統一党 (イエキーティー), シリア・クルド左派党イブラーヒーム派, シリア・クルド進歩民主党ダーウド派, シリア・クルド国民民主党が, 「例外的統計」実施41周年に合わせて, 国籍剥奪者権利擁護委員会 (Lajna al-Difā' an Huqūq al-Mujarradīn min al-Jinsiya), シリア民主的諸自由・人権擁護諸委員会 (Lijān al-Difā' an al-Hurriyāt al-Dīmuqrāṭīya wa Huqūq al-Insān fī Sūriyā, 英語名Committees for the Defense of Democratic Freedoms and Human Rights in Syria, 略称CDF), シリア人権協会 (Jam' iya Huqūq al-Insān fī Sūriya), 市民社会再生諸委員会 (Lijān Ihya' al-Mujtamā' al-Madanī) とともにダマスカス市内の首相府前でデモを実施。約200人以上を動員し, 国籍を剥奪されたクルド人の権利回復などを要求。なお, シリア・クルド進歩民主党ダルウィーシュ派, クルド・シリア民主党, シリア・クルド民主党 (アル・パールティー) イブラーヒーム派, シリア・クルド左派党ムラード派は予定していた参加を取りやめた。
2003年12月10日	シリア・クルド民主同盟, シリア・クルド民主戦線, シリア・クルド人民連合党, シリア・クルド・イエキーティー党が, 世界人権の日に合わせて, 国籍剥奪者権利擁護委員会, 市民社会再生諸委員会, CDF, シリア人権協会, シリア・グローバリズム抵抗活動家 (Nāshitū Munāhaḍa al-'Awlama fī Sūriya), シリア人権文化クラブ (al-Muntadā al-Thaqāfī li-Huqūq al-Insān fī Sūriya), シリア人権擁護連盟 (Rābiṭa al-Difā' an Huqūq al-Insān fī Sūriya), ヒムス・パレスチナ・イラク救済委員会 (Lajna Naṣra Filastīn wa al-'Irāq bi-Himṣ), ジャマール・アタースィー民主的対話会議 (Muntadā Jamāl al-Atāsī li-l-Hiwār al-Dīmuqrāṭī, 以下アタースィー会議), 共産主義行動党 (Ḥizb al-'Amāl al-Shuyū'ī), シリア国民民主連合 (al-Tajammū' al-Waṭanī al-Dīmuqrāṭī fī Sūriya) とともにダマスカス市内の首相府前でデモを実施。数百人を動員し, 戒厳令の解除, 政治犯の釈放などとともに, 国籍剥奪者の権利回復を要求。これに対して治安当局はデモを強制排除。

2004年3月	カーミシュリー事件が発生。
2004年8月29日	シリア・クルド左派党（派閥は不明）、シリア・クルド人民連合党、シリア・クルド民主統一党（イエキーティー）、シリア・クルド・イエキーティー党がダマスカス市内の国家最高治安裁判所前でデモを実施。数百人を動員し、カーミシュリー事件の逮捕者の公判に抗議。
2004年10月31日	シリア・クルド・イエキーティー党、シリア・クルド人民連合党、シリア・クルド左派党ムラード派がワーディー・アル＝マシャリーウからダマスカス市内の国家最高治安裁判所前への抗議行進を実施。約600人を動員し、カーミシュリー事件で逮捕されたクルド人の公判に抗議するとともに、逮捕者との団結、すべての言論犯・政治犯の釈放、戒厳令の解除などを要求。シリア・クルド民主統一党（イエキーティー）が支持を表明。
2004年11月28日	シリア・クルド・イエキーティー党、シリア・クルド人民連合党、シリア・クルド左派党ムラード派がワーディー・アル＝マシャリーウからダマスカス市内の国家最高治安裁判所前への抗議行進を再度実施。約600人を動員し、カーミシュリー事件で逮捕されたクルド人の公判に抗議するとともに、逮捕者との団結、すべての言論犯・政治犯の釈放、戒厳令の解除などを要求。シリア・クルド民主同盟が支持を表明。
2004年12月9日	シリア・クルド民主同盟とシリア・クルド民主戦線が、シリア・クルド・イエキーティー党、シリア・クルド人民連合党、シリア国民民主連合、アタスィー会議、シリア・グローバリズム抵抗活動家、シリア・アラブ人権機構（al-Munazzama al- Arabiyya li-Huqūq al-Insān fī Sūriyā）、シリア人権協会、共産主義行動党、市民社会再生諸委員会、CDF、国籍剥奪者権利擁護委員会とともに、ダマスカス市内の首相府前でデモを実施。約1000人を動員し、戒厳令の解除、政治犯釈放、政党法制定、国籍剥奪者の権利回復、民族的・文化的特性の尊重などを要求。
2005年1月17日	シリア・クルド民主同盟、シリア・クルド民主戦線、シリア・クルド・イエキーティー党、シリア・クルド人民連合党が、アラブ民族主義勢力、マルクス主義勢力、人権擁護団体とともに基本的自由・人権擁護国民調整委員会を結成。
2005年2月15日	シリア・クルド・イエキーティー党、シリア・クルド人民連合党、シリア・クルド左派党ムラード派がダマスカス市内の国家最高治安裁判所前でデモを実施。数百人を動員し、カーミシュリー事件で逮捕されたクルド人の公判に抗議。
2005年3月10日	基本的自由・人権擁護国民調整委員会が、戒厳令発令42周年とカーミシュリー事件1周年にあわせてダマスカス市内の司法裁判所前でデモを実施。約500人を動員し、戒厳令の解除、すべての言論犯・政治犯の釈放、「クルド問題」の民主的解決などを要求。これに対して治安当局は、バース党の青年党員にデモを「襲撃」させ、強制排除。

2005年 3月12日	シリア・クルド民主同盟, シリア・クルド民主戦線, シリア・クルド人民連合党, クルド・シリア民主党, シリア・クルド・イエキーティー党が, カーミシュリー事件1周年にあわせて午前11時から 5 分間の黙祷を呼びかける。
2005年 5月21日	シリア・クルド・イエキーティー党, シリア・クルド・ムスタクバル潮流, クルド・シリア民主合意, シリア・クルド人民連合党が, カーミシュリー市でデモを実施。約1500人を動員し, ハズナウィー師失踪殺害事件の真相究明, 「クルド問題」の解決, 戒厳令の解除, 政治犯の釈放を要求するが, 治安当局によって弾圧される。
2005年 5月30日	基本的自由・人権擁護国民調整委員会が, ダマスカス市内のユースフ・アズム広場でデモを実施。数千人を動員し, ハズナウィー師失踪殺害事件の真相究明とすべての政治犯釈放を要求。
2005年 6月 2日	シリア・クルド・イエキーティー党(イエキーティー)がアレップ大学でデモを実施。約1000人の学生を動員し, ハズナウィー師失踪殺害事件を「テロ」行為と非難。
2005年 6月 5日	シリア・クルド・アーザーディー党とシリア・クルド・イエキーティー党が, カーミシュリー市でデモを実施。数千人を動員し, ハズナウィー師失踪殺害事件に抗議するとともに, 「クルド問題」の民主的解決, 政党法定, 戒厳令解除, 国民統合強化, 政治犯釈放などを要求。シリア・クルド・ムスタクバル潮流がデモへの団結を表明。デモ参加者は事態の沈静化のために動員された治安当局と衝突, 治安当局 2 人が死亡, クルド人 3 人が負傷, 60人以上が逮捕・起訴。デモはアイン・アル=アラブ市でも実施され, 8 人が逮捕。
2005年 6月27日	2003年 6月のダマスカス市内(ユニセフ前)でのデモでの逮捕者 3人(禁固 2年の刑期で服役)の釈放を祝う祝典が治安当局によって禁止される。
2005年 8月15日	シリア民主連合党がアイン・アル=アラブでPKK結党を祝う祝典を開催。これに対して治安当局は祝典を強制排除し, 57人を逮捕。
2005年10月16日	「ダマスカス国民民主変革宣言」発表。
2005年12月10日	シリア・クルド・イエキーティー党, シリア・クルド・ムスタクバル潮流が, 世界人権の日にあわせて, ダマスカス市内のサブウ・バフラート広場でデモを実施, 約200人を動員し, 人権尊重, 民主化, クルド人の民族的権利の憲法での保障などを要求。これに対して治安当局はデモを強制排除。
2005年12月11日	シリア民主連合党が, 世界人権の日にあわせて, ダマスカス市内の国家最高治安裁判所前でデモを実施。約100人を動員し, クルド人政治犯の釈放を要求。

(出所) 青山 [2005b, 2005c: 43, 48, 50, 2006a, 2006b], Hizb Yakūtī al-Kurdī fī Sūriyā [2005], Hizb Yakūtī al-Kurdī fī Sūriyā - al-Lajna al-Siyāsiya [2005a], Lajna al-Tansīq al-Waṭanī li-l-Difā‘ an al-Ḥurriyāt al-Asāsiya wa Ḥuqūq al-Insān [2005] などより筆者作成。

クルド民主党（アル・パールティー）ムスタファー派，シリア・クルド左派党イブラーヒーム派，シリア・クルド進歩民主党ダーウド派，シリア・クルド国民民主党からなる（表4を参照）。

両派の関係は当初から対立的・排他的な雰囲気包まれた。たとえば，穏健派のシリア・クルド進歩民主党ダルウィーシュ派（そして同派が主導するシリア・クルド民主同盟）が政府高官を招待して会議や祝典（2002年6月半ばの祝典，10月初めのフォーラム，11月上旬の会議など）を開催し，政権寄りの姿勢を示すと，シリア・クルド民主同盟内の急進派（シリア・クルド人民連合党，シリア・クルド民主統一党〔イエキーティー〕，シリア・クルド左派党ムラード派）が反発，2002年6月には，シリア・クルド人民連合党が同盟からの脱退を宣言した。また，急進派がB・アサド政権に圧力をかけるかたちでデモ（2003年6月25日と10月5日のデモ）を実施すると，穏健派は「[デモ活動は]海外から着想を得ており，国の安定を揺るがすことをめざしている」(al-Ra'y al-Āmm [2003])と批判し，デモへの参加を辞退・拒否した。

急進派と穏健派の対立は，クルド人シャイフ，ムハンマド・マアシューク・ハズナウィー（Muḥammad Ma'shūq al-Khaznawī）師の失踪殺害事件⁽¹⁴⁾が発生した2005年半ば以降に激化した。6月5日，急進派のシリア・クルド・イエキーティー党とシリア・クルド・アーザーディー党がカーミシュリー市で事件の真相究明を求めるデモを断行し，治安当局と衝突すると，穏健派は弾圧を招いた急進派の行動を厳しく批判したのである（al-Jabha al-Dīmuqrāṭīya al-Kurdīya fī Sūriyā and al-Taḥāluf al-Dīmuqrāṭī al-Kurdī fī Sūriyā [2005]，al-Ḥizb al-Dīmuqrāṭī al-Kurdī al-Sūrī [2005]）。これを機に両派による非難の応酬が激化，6月7日にシリア・クルド・イエキーティー党のフアード・アリークー（Fu'ād 'Alīkū）政治委員会（政治局）メンバーが「街頭で我々に力に対抗し，我々を政治的に孤立させた」(‘Alīkū [2005])と述べて穏健派を追及すると，8月21日，シリア・クルド進歩民主党ダルウィーシュ派が「[シリア・クルド・イエキーティー党の党員は]偽善者，詐欺師で……，クルド[民族主義]諸組織どうしの憎悪感をかき立てるだけでなく，クルド人民の……敵に奉仕する」(al-Ḥizb

表4 クルド民族主義勢力の路線対立

	急進派	穏健派
民族至上主義派	シリア・クルド・イエキーティー党 シリア・クルド・アーザーディー党 卅 (シリア・クルド人民連合党 卄, シ リア・クルド左派党ムラード派 卄) シリア民主連合党 シリア・クルド・ムスタクバル潮流	クルド・シリア民主党 卄
民主化重視派	シリア・クルド民主統一党 (イエキ ーティー) 卄 クルド・シリア民主合意	シリア・クルド民主党 (アル・パー ルティー) イブラーヒーム派 卄 シリア・クルド民主党 (アル・パー ルティー) ムスタファー派 卄 シリア・クルド左派党イブラーヒ ーム派 卄 シリア・クルド進歩民主党ダルウィ ーシュ派 卄 シリア・クルド進歩民主党ダーウド 派 卄 シリア・クルド国民民主党 卄

(注) 卄はシリア・クルド民主同盟加盟党派(シリア・クルド人民連合党は2002年6月に脱退, クルド・シリア民主党は2003年12月に脱退, シリア・クルド左派党ムラード派は2005年5月のシリア・クルド・アーザーディー党結成とともに脱退), 卄はシリア・クルド民主戦線加盟党派(シリア・クルド・アーザーディー党は2005年5月に加盟し, 2006年3月に脱退)。

(出所) 筆者作成。

al-Dīmuqrāṭī al-Taqaḍḍumī al-Kurdī fī Sūriyā - Maktab al-Iʿlān [2005]) と反論したのである。

第2の争点は、クルド民族主義と「民主化」のどちらに重きを置くかという問題であり、クルド人の民族的生存権や政治的・文化的自治の保障を第一義に据えようとする陣営(民族至上主義派)と、市民社会の確立, 基本的人権の尊重, 戒厳令の解除, 政治犯の釈放, 国外亡命者の帰国許可など, いわゆる「民主化」の範疇に含まれる要求のひとつとして「クルド問題」の解決を掲げ, 他のイデオロギー・政治潮流に属す反政府組織との共闘を積極的に進める陣営(民主化重視派)が対立した。

民族至上主義派は、急進派のシリア・クルド・イエキーティー党、シリア・クルド・アーザーディー党（その前身のシリア・クルド人民連合党とシリア・クルド左派党ムラード派）、シリア民主連合党、シリア・クルド・ムスタクバル潮流、そして穏健派のクルド・シリア民主党からなる。これに対し民主化重視派は、シリア・クルド民主同盟のシリア・クルド進歩民主党ダルウィーシュ派、シリア・クルド民主統一党（イエキーティー）、シリア・クルド民主党（アル・パールティー）イブラーヒーム派、シリア・クルド民主戦線のシリア・クルド民主党（アル・パールティー）ムスタファー派、シリア・クルド左派党イブラーヒーム派、シリア・クルド進歩民主党ダーウド派、シリア・クルド国民民主党、そしてクルド・シリア民主合意からなる（表4を参照）。

両派の対立もまた、デモの実施に際して表面化した。たとえば、民主化重視派が主導した2003年10月と12月のデモでは、シリア・クルド・イエキーティー党が、デモそのものには参加したものの、「クルド問題」の解決を最優先に掲げないそこでの要求を批判した。また2003年12月のデモでは、クルド民族主義の色彩が抑えられたことを不服とするクルド・シリア民主党がシリア・クルド民主同盟から脱退した。さらに2004年12月のデモでも、シリア・クルド・イエキーティー党とシリア・クルド人民連合党が、国籍剥奪者の権利回復以外にクルド人に関する明確な記述がない共同声明への署名を拒否した。

こうした対立は、民族至上主義派と民主化重視派の双方がアラブ民族主義勢力やマルクス主義勢力、そして人権擁護団体からなる政治同盟、基本的自由・人権擁護国民調整委員会（Lajna al-Tansīq al-Waṭanī li-l-Difāʿ ʿan al-Ḥurrīyāt al-Asāsīya wa Ḥuqūq al-Insān¹⁵⁾）の結成（2005年1月）に参加したことで解消したかに見えた。だが、呉越同舟にも似た両派の共同歩調は長続きしなかった。2005年9月8日に開催された基本的自由・人権擁護国民調整委員会の会合で、シリア・クルド・イエキーティー党とシリア・クルド・アーザーディー党のイニシアチブのもと、「例外的統計」43周年に合わせたデモが計画されると、シリア・クルド民主同盟とシリア・クルド民主戦線が、クルド民族主義を鼓舞しようとする民族至上主義派に不快感を示し、会合をボイコットしたので

ある (*Akhbār al-Sharq* [2005c])。

最終的に、民族至上主義派と民主化重視派の対立は、2005年10月16日の「ダマスス国民民主変革宣言」(“*T’lān Dimashq li-l-Taghyīr al-Waṭanī al-Dīmuqrāṭī*” [2005])の発表をもって決定的となった。この宣言は、シリア国内外で活動するほとんどすべての政治組織が参同・署名⁽¹⁶⁾した初の声明で、民主主義の実現、権威主義・全体主義の廃止、イスラームの尊重、「クルド問題」の民主的解決、戒厳令解除、1980年法律第49条(注7を参照)など例外的法律の廃止、国民対話、抜本的改革、外圧に依拠した改革の拒否、市民社会の活性化、選挙の実施などが目標として掲げられた。

この宣言に対して、民族至上主義派は反政府勢力の大同団結そのものには賛同した。だが、「シリアのクルド問題の民主的・公正な解決策の案出による、国籍、文化、国語教育におけるクルド人とそれ以外の国民の完全なる平等の保障」という宣言の文言を、「クルド人の[民族としての]権利に上限を設けようとしている」(*Ḥizb Yakīfī al-Kurdī fī Sūriyā - al-Lajna al-Siyāsīya* [2005b])、「シリア第2の民族としてのクルド人の現状を反映していない」(*Ḥizb Āzādī al-Kurdī fī Sūriyā* [2005])、「クルド人の民族としての存在に言及していない」(*Tayyār al-Mustaqbal al-Kurdī fī Sūriyā - Maktab al-‘Alāqāt al-‘Āmma* [2005])、「憲法においてクルド人を第2の民族として承認する、との要求が盛り込まれていない」(*Ḥizb al-Ittiḥād al-Dīmuqrāṭī fī Sūriyā - al-Lajna al-Tanfīdhīya* [2005])と批判し、宣言への署名を拒否した⁽¹⁷⁾。そしてそれにより、民主化重視派だけでなく、他の反政府勢力との共闘をも放棄したのである。

(2) 共同戦線

基本的自由・人権擁護国民調整委員会への民族至上主義派と民主化重視派の参加からも明らかなように、クルド民族主義勢力の活動は対立や反目のみによって彩られていたわけではなく、B・アサド政権下でこれまで2度、積極的なかたちで共同戦線を敷き、勢力の糾合をめざした。

最初の共同戦線は、第8期人民議会選挙(2003年3月2、3日投票)において

構築された。この選挙において、クルド民族主義勢力は、シリア・クルド民主統一党（イエキーティー）のイニシアチブのもと選挙協力を行うための協議を重ね（Amude.net [2003c]）、2003年2月17日、当時国内で活動していたすべてのクルド民族主義政党・政治組織（シリア・クルド民主同盟、シリア・クルド民主戦線、シリア・クルド・イエキーティー党、シリア・クルド人民連合党）が「シリアにおけるすべてのクルド政党」(Majmū' al-Aḥzāb al-Kurdiya fi Sūriyā)⁽¹⁸⁾ の名で共同声明を発表、ハサカ県選挙区（定数14議席）で無所属に割り当てられた4議席を獲得するため、統一候補を擁立する合意に達したことを明らかにした（Majmū' al-Aḥzāb al-Kurdiya fi Sūriyā [2003]）。

しかし、クルド民族主義勢力の選挙協力は、投票を待たずして早々に挫折した。その原因は、ハサカ県選挙区での統一候補擁立を主導したシリア・クルド民主統一党（イエキーティー）が、他県の選挙区で独断的に候補者選びを進めたことに、シリア・クルド左派党ムラード派が反発し、選挙協力の解消と独自の選挙戦の展開をめざすようになったことにあった（Amude.net [2003a , 2003b]、Ḥizb Yakīṭī al-Kurdi fi Sūriyā [2003a]）。シリア・クルド民主同盟を構成する2党派の対立は、クルド民族主義勢力全体の厭戦ムードを高め、最終的には、2月22日から23日にかけて、シリア・クルド民主同盟、シリア・クルド民主戦線、シリア・クルド人民連合党、シリア・クルド・イエキーティー党が次々と出馬と投票へのボイコットを宣言していった（Ḥizb al-Ittiḥād al-Sha'bī al-Kurdi fi Sūriyā - al-Lajna al-Markazīya [2003]、Ḥizb Yakīṭī al-Kurdi fi Sūriyā [2003b]、al-Taḥāluf al-Dīmuqrāṭī al-Kurdi fi Sūriyā and al-Jabha al-Dīmuqrāṭiya al-Kurdiya fi Sūriyā [2003]）。

クルド民族主義勢力による選挙のボイコットは、「[バス党の] 圧勝があらからじめ約束され、クルド人の人口比に応じた議席数を獲得できない」(Ḥizb al-Ittiḥād al-Sha'bī al-Kurdi fi Sūriyā - al-Lajna al-Markazīya [2003]) といった理由によって正当化された。だが、統一候補の擁立がクルド民族主義勢力内の主導権争いによって失敗に終わったことは明らかであり、その意味で彼らの自己弁護は、自身の政治的無能を他者（B・アサド政権と現行の選挙制度）に責任

転嫁する行為として批判されて然るべきものだった。

2度目の共同戦線はカーミシュリー事件に際して構築された。カーミシュリー事件とは2004年3月に発生したシリア現代史上初のクルド人による民衆暴動で、3月12日にカーミシュリー市で予定されていた地元サッカー・チームとデイル・ゾール県所属のチームとの対戦直前に起きた、両チーム・サポーター（地元のクルド系住民とデイル・ゾール県から訪れたアラブ系住民）のスタジアム内での衝突に端を発していた。この衝突は、まもなく市全土に拡大、暴徒化した民衆に警察・治安部隊が無差別発砲を行うに至り、事態は争乱の様相を呈した。また事件発生を受け、ハサカ市、アフリーン市、アイン・アル＝アラブ市、ダマスカス市、ダウンマル市（ワーディー・アル＝マシャーリーウ）、アレppo市などで、クルド系住民が連日のようにゼネストやデモを組織し、カーミシュリー市での暴動の真相究明を政府に要求するとともに、クルド人に対する差別の撤廃を訴えた。B・アサド政権はこれら一連の暴動に対して警察・治安部隊を動員し、同月18日までに弾圧したが、その間、30人以上が死亡、約130人が負傷し、約1700人の市民が逮捕された。また約600人がイラクへ避難し、そこで難民生活を強いられた⁽¹⁹⁾。

カーミシュリー事件の発生を受けて、クルド民族主義勢力は以下2つの戦術をもって事態に対処しようとした。第1の戦術は、クルド民衆の不満を反映したかたちで、「クルド問題」の解決やクルド人の権利向上を主唱するというものである。クルド民族主義勢力は「シリアにおけるすべてのクルド政党」の名で連日声明を発表し、B・アサド政権に対して、市民への無差別発砲・逮捕の停止、事件の真相究明、政府・地方自治体関係者の処罰、犠牲者の家族への補償、逮捕者の釈放、「クルド問題」の民主的解決などを要求した（Majmū' al-Aḥzāb al-Kurdiyya fī Sūriyā [2004b, 2004c, 2004d]などを参照）。また事件の犠牲者を追悼するため、3月21日のネウローズ（Newroz, クルド語で「新たな日」を意味する春分の日の祝祭、シリアでは母の日）を哀悼の日とする決定を下し、祝祭の自粛、黒い紋章の着用、黒旗の掲揚をクルド人に求めるとともに、シリア国旗と大統領の写真の掲揚自粛と、クルド人の惨状に抗議し、

「クルド問題」の解決を求める横断幕・プラカードの設置を呼びかけた (Majmū' al-Aḥzāb al-Kurdīya fī Sūriyā [2004e, 2004f, 2004g])。第2の戦術は、事態の收拾にあえて協力することで、B・アサド政権に政治的「貸し」を作り、活動を有利に進めようとするというものである。彼らは、治安当局が暴動弾圧にあたる最中に、暴徒(クルド民衆)に対する自制と暴力の停止の呼びかけ (Majmū' al-Aḥzāb al-Kurdīya fī Sūriyā [2004a])などを参照)と、政府高官との接触・交渉を同時並行的に行うことで⁽²⁰⁾、B・アサド政権に政治的譲歩を促し、自らの要求を受け入れさせようとしたのである。

しかし、クルド民族主義勢力のこうした戦術は何らの政治的成果も生み出さなかった。そればかりか、2004年5月末から6月初めにかけて、B・アサド政権は各党派に政治活動の停止を「要請」し、カーミシュリー事件に乗じるかたちで活発な動きを見せたクルド民族主義勢力への規制を強化したのである (Efrin.net [2004e, 2004f])。これに対して、クルド民族主義勢力は6月、「シリアにおけるすべてのクルド政党」の名で声明を発表し、クルド民族主義政党の活動の正統性をクルド人民の要求を代弁している点に求めたうえで、「シリアに政党法が存在しないなか……,クルド[民族主義]政党が法的認可を得ていないことは、その合法性の欠如を意味しない」(Majmū' al-Aḥzāb al-Kurdīya fī Sūriyā [2004h])と主張し、活動の継続を宣言した。だが、その後の彼らの活動は路線対立のなかで困難を極めたのである。

以上、B・アサド政権下でのクルド民族主義勢力の活動を詳しく見たが、そこから明らかになったのは、路線対立、主導権争い、そして政権との政治的取引を画策するような戦術が、活動そのものを妨げ続けるという現実であった。

おわりに

B・アサド政権とクルド民族主義勢力の対決(そして政権と反政府勢力全体

の対決)は、現在もお決着を見ておらず、その行方は予断を許さない状況にある。両者の攻防は、「クルド問題」の解決や「民主化」実現の可否だけでなく、権威主義体制の存続そのものにも影響を与える可能性をもっていると考えられるが、そこでの政治的勝利、あるいは政治的優位の確保は、B・アサド政権とクルド民族主義勢力がそれぞれに抱える課題をいかに克服するかにかかっている。

B・アサド政権にとって最大の課題は、クルド民族性に起因する亀裂を配慮したかたちでいかに政治的安定性を確保するかということである。第3節1で指摘したとおり、B・アサド政権は、前政権において特徴的であった亀裂操作(亀裂の強調を回避するような人材登用術など)への依存度を低下させる一方で、「クルド問題」解決に向けた積極的な意思表示とクルド民族主義勢力への部分的活動規制緩和を通じて、クルド民族性に起因する亀裂を政治に反映させようとしている。だが、議会制民主主義体制の構築ではなく、権威主義体制の維持を前提とした現下において、この傾向は政権への不満を鬱積させ、政治的安定性を脅かす危険をはらんでいる。なぜなら、亀裂操作は、潜在的な反政府分子を懐柔し、政権に対する彼らの不満の爆発を抑えるためのある種の「安全弁」としての機能を果たしてきたからである。つまり、B・アサド大統領が対クルド政策を成功させるには、権威主義体制の抜本的な構造改革を断行し、亀裂と政治の連関を積極的に保障するような制度を構築するか、自身にとっての正統性の最大の根拠である改革志向を放棄し、権威主義体制のもとで亀裂操作を繰り返すかのいずれかしかないのである。

一方、クルド民族主義勢力も主に2つの課題を抱えている。第1の課題は、組織の多様化や路線対立によって強められる「非民主的」イメージの払拭である。第2節2や第3節2で見たとおり、自らの意見を集約できないまま路線対立を繰り返し、その過程で排他主義や不寛容に陥るクルド民族主義勢力のありようは、権威主義体制を変革し、「民主主義」や「多元主義」を実現する能力を欠いているとの疑念を高める。こうした疑念をはらすには、クルド民族主義勢力(さらにはシリアのすべての反政府勢力)が、クルド人だけを対

象とするクルド民族主義とシリア国民全体を対象とする「民主主義」を両立させるためのヴィジョンを共有し、そのヴィジョンのなかで路線対立を生産的な議論に転化することが最低限必要であろう。

第2の課題は、クルド民衆との乖離をどう克服するかという問題である。カーミシュリー事件でクルド民族主義勢力がB・アサド政権との政治的取引を意図した行動に出たことは、暴動によって現状への不満を表明させざるをえなかった民衆の意思を的確に捉える能力を彼らが欠いていることを端的に示している。こうした乖離こそが、「クルド問題」の解決を遅らせるだけでなく、B・アサド政権によるクルド人の抑圧を容易にしているのであり、その打開には、民衆との有機的な結びつきを確立し、動員力と組織力を高めることが急務なのである。

クルド民族主義勢力にとって、この2つの課題は矛盾している。第1の課題は、亀裂が政治的対立を助長することへの警戒を要する一方で、第2の課題は、クルド民族主義に依拠して亀裂を強調することを不可避とする。こうした点を踏まえただけでも、B・アサド政権下のシリアにおけるクルド民族主義勢力の活動は困難をとまなうことが予想される。だが、これらの課題を克服することなしに、「クルド問題」の解決、クルド人の民族的生存権、政治的・文化的、そして「民主化」といった一連の要求を実現するための具体的なステップが踏み出されることはないだろう。

〔注〕

- (1) シリアの政治勢力は、アラブ民族主義（バアス主義、ナセル主義）、マルクス主義、シリア民族主義、イスラーム主義、クルド民族主義、その他（リベラリズム、アッシリア民族主義など）、という6つのイデオロギー・政治潮流に分類できる（青山 [2005b: 59]）。
- (2) また、保守勢力と革新勢力の中間に位置する政治組織としてシリア・ムスリム同胞団があった。彼らの社会的出自は保守勢力と同じだったが、その政治的志向は革新勢力に近かった（青山 [1995: 51-55]）。
- (3) カウミーユーン、クトリーユーン、軍事委員会については、青山 [2001b:

208-209], アジア経済研究所 [1983: 85]などを参照。

- (4) シリアのアラウィー派は、マターウィラ (al-Matāwira), ハイヤーティーン (al-Khayyātīn), ハッダーディーン (al-Ḥaddādīn), カルビーヤ (al-Kalbīya) という4つの部族に大別され、H・アサド国防大臣はマターウィラ、ジャディード地域指導部副書記長はハッダーディーンの出である (van Dam [1979: 56])。
- (5) 2006年1月現在、バース党、アラブ社会主義者運動 (Ḥaraka al-Ishtirākīyīn al-'Arab) アフマド・ムハンマド・アフマド (Aḥmad Muḥammad al-Aḥmad) 派、国民誓約党 (Ḥizb al-'Ahd al-Waṭanī), 統一社会主義者党 (Ḥizb al-Waḥdawīyīn al-Ishtirākīyīn), 統一社会民主主義党 (al-Ḥizb al-Waḥdawī al-Ishtirākī al-Dīmuqrāṭī), アラブ社会主義連合党 (Ḥizb al-Ittiḥād al-Ishtirākī al-'Arabī), アラブ民主連合党 (Ḥizb al-Ittiḥād al-'Arabī al-Dīmuqrāṭī), シリア共産党ウィサール・ファルハ (Wiṣāl Farḥa) 派、同ファイサル派、シリア民族社会党マハーイリー派からなる。
- (6) 「非公認」の組織は、協会・民間団体法 (1958年第93法, 1958年7月8日施行) に則って公認申請することも不可能でないが、彼らによる申請が認可されたことはない。
- (7) シリアの政党・政治組織のなかで「非合法」と認定されているのは、1980年法律第49条で所属メンバーへの極刑が定められているシリア・ムスリム同胞団だけである。
- (8) Human Rights Watch [1996: 10], al-Maḥmūd [2003], McDowall [1992: 121, 2000: 466], Nazdar [1980: 211] などによると、クルド人はシリアの総人口の8%から11%を占める。
- (9) またこれらの政党・政治組織の他にも、シリア・クルド人権委員会 (アラビア語名 Lajna Ḥuqūq al-Insān al-Kurdī fī Sūriyā, クルド語名 Malpera Mafê Mirovên Kurdê li Sûriyê, 通称 Maf), シリア・クルド人権侵害監視団 (al-Marṣad al-Kurdī li-Intihākāt Ḥuqūq al-Insān fī Sūriyā, 通称 RUWANGE), シリア人権・基本的自由擁護クルド機構 (al-Munazzama al-Kurdīya li-Difa' 'an Ḥuqūq al-Insān wa al-Ḥurīyāt al-'Āmma fī Sūriyā, 通称 DAD) といった人権団体がある。
- (10) 国内の有識者が中心となって2000年末に開始した改革運動の通称で、文化会議の会合を通じて、市民社会の設立などを議論し、B・アサド政権に改革を迫った。2001年初めに最高潮に達したこの運動は、同年2月に文化会議の会合が閉鎖に追い込まれた後、8月から9月にかけての指導者・活動家10人が逮捕され、そして2002年夏までにその全員が有罪判決を受けたことで完全に頓挫した (青山 [2005a: 37-56] を参照)。
- (11) 『進歩国民戦線憲章』基本綱領第3条は、加盟政党をアラブ民族主義勢力とマルクス主義勢力に限定してきた (Mithāq al-Jabha al-Waṭanīya al-Taqaaddumīya [1972: 19-20])。

- (12) シリア共産党は1986年にバクダーシュ派（現ファルハ派）とファイサル派に分裂したが、このうちファルハ書記長（バクダーシュの妻）とアンマール・バクダーシュ（‘Ammār Bakdāsh）政治局メンバー（バクダーシュの長男、機関紙『サウト・アッ＝シャアブ』〔*Ṣawt al-Shaʿb*〕編集長）が指導する前者の党員のほとんどはクルド人である。
- (13) なお、亀裂の操作とは若干内容を異にするが、H・アサド前政権は、外国（トルコやイラク）のクルド民族主義勢力を保護することで、シリアのクルド人の政治化を抑えようとした。とりわけ、1980年代と1990年代には、PKKの対トルコ武装闘争を支援することで、シリアのクルド人の政治的関心を国外に向けようとした（青山〔2005c: 57-58〕）。また、トルコ政府の圧力によって、アブドゥッラー・オジャラン（Abdullah Ocalan）PKK党首がシリアを出国（1998年10月、その後1999年2月に逮捕）すると、H・アサド前政権は1998年12月、「PKKの残党を保護し、政権に奉仕させる」（*Yekîti*〔2000b〕）ため、シリア国民民主連合（al-Tajammuʿ al-Waṭanī al-Dīmuqrāṭī al-Sūrī）と称する組織を結成させた。だが、この「傀儡」組織は実質的な活動をほとんど行わないまま消滅した。
- (14) 2005年5月10日、イスラーム研究センター（Markaz al-Dirāsāt al-Islāmīya）副所長を務めるハズナウィー師がダマスカス滞在中に失踪し、同月31日にデイル・ゾールでその遺体が発見された事件。この事件はハズナウィー師の失踪当初から、シリアの治安当局による犯行と疑われた。ハズナウィー師は欧州を訪問した2005年2月半ば、シリア・ムスリム同胞団のアリー・サドルッディーン・バヤーヌーニー（ʿAlī Ṣadr al-Dīn al-Bayānūnī）最高監督者と会見し、同胞団の政治姿勢を支持するとともに、「クルド問題」解決に向けた協力を要請した。事件の背景には、こうした動きによってシリア・ムスリム同胞団とクルド民族主義勢力の接近が促されることへの治安当局の警戒感があったと考えられている（*Akhbār al-Sharq*〔2005a〕、Amnesty International〔2005〕、al-Bayānūnī〔2005〕、Ḥizb al-Waḥda al-Dīmuqrāṭī al-Kurdī fī Sūriyā (Yakīti)〔2005〕）。
- (15) 加盟政党は以下の通り。シリア・クルド民主同盟、シリア・クルド民主戦線、シリア・クルド・イエキーティー党、シリア・クルド人民連合党、シリア国民民主連合、市民社会再生諸委員会、アターシー会議、シリア人権協会、CDF、シリア・アラブ人権機構、共産主義行動党、国籍剥奪者権利擁護委員会。
- (16) 「ダマスカス国民民主変革宣言」は、シリア国民民主連合、市民社会再生諸委員会、シリア・クルド民主同盟、シリア・クルド民主戦線、国民民主ムスタクバル党（Ḥizb al-Mustaḥbal al-Waṭanī al-Dīmuqrāṭī）、そして無所属の有識者の連名で発表され、その後数日の間に、クルド・シリア民主合意、シリア・ムスリム同胞団、共産主義行動党、シリア国民会議（al-Majlis al-Waṭanī al-Sūrī）、シリア近代民主主義党（Ḥizb al-Ḥadāth al-Ḥadātha wa al-Dīmuqrāṭīya li-Sūriya）、

民主統一バース主義者連合 (Tajammu' al-Ba'thiyīn al-Dīmuqrāṭiyyīn al-Waḥdawīyīn), シリア自由国民同盟発足委員会 (al-Hay'a al-Ta'sīsiya li-Taḥāluf al-Waṭaniyyīn al-Aḥrār fī Sūriya), シリア改革党 (Ḥizb al-Iṣlāḥ al-Sūrī), シリア民主行動委員会 (al-Lajna al-Sūriya li-l-'Amal al-Dīmuqrāṭī), アッシリア人民機構 (al-Munaẓẓama al-Āthūriya al-Dīmuqrāṭiyya), シリア人権委員会 (al-Lajna al-Sūriya li-Ḥuqūq al-Insān), アタースィー会議, シリアのための連合 (al-Tajammu' min ajl Sūriyā), シリア・アラブ人権機構などが署名した (*al-Mawqif al-Dīmuqrāṭī* [2005: 20-42])。

- (17) なお, 人権団体のシリア・クルド人権委員会とシリア国外で活動するシリア・クルディスタン民主パルティーも「ダマスкас国民民主変革宣言」に否定的な立場を示した(Bārtī Dīmuqrāṭī Kurdistan Sūriyā - al-Lajna al-Qiyādiya [2005], *al-Mawqif al-Dīmuqrāṭī* [2005: 33-34])。
- (18) 「シリアにおけるすべてのクルド政党」にはその後(2004年 6 月)にシリア民主連合党が参加した。
- (19) 当局は, 2004年 3 月末, 5月, 12月, そして2005年 3 月に恩赦などを通じて約1300人の逮捕者を段階的に釈放した。その間, 約200人を国家最高治安裁判所と軍事裁判所に起訴し, 懲役 2 年から 3 年の有罪判決を下していった (*Akhbār al-Sharq* [2004a, 2004b, 2004c, 2004d, 2005b], Alūjī [2004], Amude.net [2005], Efrin.net [2004a, 2004b, 2004c, 2004d, 2004g, 2004h], Ḥamīdī [2004a, 2004b, 2004e, 2004f], Ḥamīdī and al-A'thaq [2004], Hevgirtin.org [2004], Ḥizb al-Waḥda al-Dīmuqrāṭī al-Kurdī fī Sūriyā (Yakīti) [2005b, 2005c], Ḥizb Yakīti al-Kurdī fī Sūriyā - al-Lajna al-Qānūniya [2005], al-Ḥizb al-Yasārī al-Kurdī fī Sūriyā et al [2005], Jam'iya Ḥuqūq al-Insān fī Sūriyā [2004], Majmū' al-Aḥzāb al-Kurdīya fī Sūriyā [2005] などを参照)。
- (20) たとえば, 2004年 3 月半ば, シリア・クルド・イエキーティー党のアリーク政治委員会メンバー, シリア・クルド人民連合党のバッシュール・アミン (Bashshār al-Amīn) 政治局メンバー, シリア・クルド国民民主党のターヒル・サフーク (Tāhir Safūk) 書記長, シリア・クルド進歩民主党ダルウィーシュ派のダルウィーシュ書記長らが, アリー・ハンムード ('Alī Ḥammūd) 内務大臣, ヒシャーム・ピフティヤール (Hishām Bikhtiyār) 総合情報部 (ムハーバラートの一つ) 長, マンスーラ政治治安部総務次長らと数度にわたって会見し, カーミシュリー事件の真相究明などを要求した。また 4 月下旬にも, シリア・クルド進歩民主党ダルウィーシュ派のダルウィーシュ書記長, シリア・クルド左派党イブラーヒーム派のムハンマド・ムーサー (Muḥammad Mūsā), シリア・クルド民主統一党(イエキーティー)のイスマーイーール・ウマル (Ismā'īl 'Umar) 前書記長, シリア・クルド民主党 (アル・パルティー) イブラーヒーム派の N・D・イブラーヒーム書記長らが, ムスタファー・トゥラース (Muṣṭafā-

fā Ṭulās) 国防大臣と会見し、同事件で逮捕されたクルド人の釈放などを要求した (*Akhbār al-Sharq* [2004a], Ḥamīdī [2004c], Ḥusaynī [2004])。

〔参考文献〕

< 日本語文献 >

- 青山弘之 [1994] 「シリア・ムスリム同胞団のプロパガンダ 1976～1982年の反政府運動を中心に」 (『日本中東学会年報』第9号) 117-141ページ。
- [1995] 「シリア・ムスリム同胞団の政治理念と政策 (1940年代後半～50年代初め)」 (『アジア経済』第36巻第11号, 11月) 47-68ページ。
- [2001a] 「『ジウムルーキーヤ』への道 (1) バッシャー・アル＝アサド政権の成立」 (『現代の中東』第31号, 7月) 13-37ページ。
- [2001b] 「『バアスの精神的父』ザキー・アル＝アルスーズィー」 (酒井啓子編『民族主義とイスラーム 宗教とナショナリズムの相克と調和』アジア経済研究所研究双書No. 514, 日本貿易振興会アジア経済研究所) 175-227ページ。
- [2002] 「『ジウムルーキーヤ』への道 (2) バッシャー・アル＝アサドによる絶対的指導性の顕現」 (『現代の中東』第32号, 1月) 35-65ページ。
- [2003] 「権威主義体制下の『民主的』プロセス 第8期人民議会選挙の政治的效果」 (『現代の中東』第35号, 7月) 56-68ページ。
- [2005a] 「権威主義・独裁維持のための『多元主義』 バッシャー・アサド政権下のシリア」 (酒井啓子・青山弘之の編『中東・中央アジア諸国における権力構造 したたかな国家・翻弄される社会』アジア経済研究所叢書1, 岩波書店) 25-70ページ。
- [2005b] 「シリアにおけるクルド民族主義政党・政治組織 (1)」 (『現代の中東』第39号, 7月) 58-84ページ。
- [2005c] 「シリアにおける『クルド問題』 差別・抑圧の「制度化」」 (『アジア経済』第46巻第8号, 8月) 42-70ページ。
- [2005d] 「シリア：民主性誇示か、権威主義維持か バアス党第10回シリア地域大会に見るアサド政権」 (『海外事情』第53巻第11号, 11月) 46-56ページ。
- [2006a] 「シリアにおけるクルド民族主義政党・政治組織 (2)」 (『現代の中東』第40号, 1月) 20-31ページ。
- [2006b] 「シリアにおけるクルド民族主義政党・政治組織 (補足)」 (『現代の中東』第41号, 7月) 65-94ページ。

アジア経済研究所編 [1983] 『現代東アラブの政治構造』調査レポート6, アジア経済研究所。

島崎浩 [2005] 「岐路に立つ反政府運動 (特集 シリア民主化の行方)」(『季刊アラブ』第114号 秋) 9-11ページ。

< 外国語文献 >

‘Abbūd, Sha‘bān [2004] “ Aḥzima al-Bu’s (wa rubbamā al-‘Unf) ḥawla Dimashq wa fī-hā: 50 Ḥayyan Mukhālīfan li-l-Qānūn Taḍumm 40 fī al-Mī’a min al-Sukkān” (ダマスカス市内および周辺における絶望 [そしておそらくは暴力] の地帯 40%の住民が住む50の地区が違法), *al-Nahār*, April 29.

Akhbār al-Sharq (<http://www.thisissyria.net/>) [2004a] “ 14 Qatīlan fī Muwājahāt Damawīya bi-al-Qāmishlī wa Iqtihām al-Sifāra al-Sūrīya fī Brüksil (カーミシュリーでの血の衝突で14人死亡, 在ブリュッセル・シリア大使館への侵入), March 14.

[2004b] “ Wāshintun Tahtajj ‘alā “ Qam’ ” Akrād Sūrīyīn wa Tu’akkid qurba Farḍ al-Uqūbāt ” (ワシントンがシリアのクルド人に対する「抑圧」に抗議, 制裁発動が間近であることを確認), March 18.

[2004c] “ Tawjīh al-Tuhma ilā 27 Qāṣiran Kurdīyan ‘alā Khalfiya Aḥdāth al-Qāmishlī wa Dimashq (カーミシュリーとダマスカスの事件をめぐって無垢なクルド人27人に容疑が向けられる), May 2.

[2004d] “ Ḥizb Kurdī Yu’lin al-Ifrāj ‘an 350 Mu’taqalan ‘ala Hāmish Aḥdāth al-Qāmishlī ” (クルド政党がカーミシュリー事件での逮捕者350人の釈放を主張), May 14.

[2005a] al-Qāmishlī “ Thakna ‘Askarīya ” ba’da Taslīm al-Shaykh Muḥammad Ma’shūq al-Khaznawī ilā Dhawī-hi Maktūlan .. wa Ta’kīd Liqā’-hi bi-al-Bayānūnī fī Brüksil ” (シャイフ・ムハンマド・ハズナウィーの遺体が家族に引き渡され, カーミシュリーは「兵舎の様相」を呈す...ブリュッセルでのバヤーヌーニーとの会見が確認される), June 1.

[2005b] “ Mī’āt al-Fārīn mundhu Aḥdāth al-Qāmishlī Ya’īshūn Zūrūfan Ṣa’ba fī Manāṭiq Akrād al-‘Irāq .. I’tiqālāt wa Tahdīdāt bi-Taslīm-him li-l-Sulṭa al-Sūrīya! ” (カーミシュリー事件の避難民数百人がイラクのクルド人地区で困難な生活を送り...逮捕とシリア当局への身柄引き渡しに怯える), August 11.

[2005c] Lajna al-Tansīq al-Waṭanī Tunāqish Anshiṭa-hā al-Qādima .. wa Tamthīl Kurdī Ḍa’f raghma Munāqasha al-Iḥtijāj fī Dhikrā “ al-Iḥṣā’ al-Istithnā’ ” ! ” (国民調整委員会が今後の活動について協議...「例外的統計」記念日の抗議行動への委員会の参加とは裏腹に, クルド人の存在感は希薄), September 12.

‘Alīkū, Fu’ād [2005] “ al-Taḥāluf wa al-Jabha Yuḥāribūn-nā ” (同盟と戦線が我々と戦

- おうとしている), Amude.net, June 7.
- Alūjī, Muḥammad Sa'īd [2004] " Bayān bi-Munāsaba Itlāq Sirāḥ 112 Mu'taqalan Siyāsīyan min Sujūn Sūriyā " (政治犯112人のシリアの刑務所からの釈放によせた声明), " December 6.
- Amnesty International [2005] " Syria: Leading Islamic Cleric " Tortured to Death ", " June 1.
- Amude.net (<http://www.amude.net/>) [2003a] " Qā'ima Kurdīya Muwaḥḥada fī al-Intikhābāt al-Qādima wa Bayān Mushtarak " (次期選挙におけるクルド統一リストと共同声明), February 18.
- [2003b] " Bada'a al-Murashshahūn al-Akrād bi-al-Di'āya al-Intikhābiya fī Madīnatay Ḥalab wa al-Raqqa " (クルド人候補がアレppoとラッカで選挙広報を開始), February 19.
- [2003c] " 'Adam al-Tawaṣṣul ilā Ittifāq Nihā'ī bi-Sha'n Asmā' al-Murashshahīn " (候補者名簿をめぐって最終合意ならず), February 22.
- [2005] " Bad' Muḥākama 18 Muwāṭṭinan Kurdīyan ladā al-Maḥkama al-'Askariya bi-Dimashq " (ダマスカス軍事裁判所でのクルド人市民18人の公判開始), February 17.
- Aoyama, Hiroyuki [2001] " History Does Not Repeat Itself (Or Does It ?!) The Political Changes in Syria after Ḥāfiẓ al-Asad's Death, " M.E.S. Series No. 50, Chiba: Institute of Developing Economies, JETRO.
- As'īd, Shākīr [2002] *al-Barlamān al-Sūrī fī Taṭawwur-hi al-Tārīkhī 1919-2001* (シリア議会, 1919~2001年までの歴史的発展のなかで), Damascus: Dār al-Madā li-l-Thaqāfa wa al-Nashr.
- Badrkhān, Sardār [2003] " al-Dhikrā al-Thalūthūn li-Mashrū' al-Ḥizām al-'Arabī fī al-Jazīra Waṣma 'Arr fī Jabīn al-Shūfīniya " (ジャズィーラでのアラブ・ベルト構想30周年はショーヴィニズムにおける恥辱). Amude.net, July 1.
- Barakat, Halim [1993] *The Arab World: Society, Culture, and State*, Berkeley: University of California Press.
- Bārtī Dīmuqrāṭī Kurdistān Sūriyā - al-Lajna al-Qiyādīya [2005] " Mawqif Bārtī Dīmuqrāṭī Kurdistān Sūriyā min " I'lān Dimashq li-l-Taghyīr " " (「ダマスカス変革宣言」に対するシリア・クルディスタン民主パルティーの立場), October 18.
- al-Bayānūnī, 'Alī Ṣadr al-Dīn [2005] " Taṣrīḥ min Jamā'a al-Ikhwān al-Muslimīn fī Sūriya ḥawla Jarīma Ightiya' al-Shaykh Muḥammad Ma'shūq al-Khaznawī " (シャイフ・ムハンマド・マアシューク・ハズナウィー暗殺の罪に関するシリア・ムスリム同胞団声明), June 1.
- Be'eri, Eliezer [1970] *Army Officers in Arab Politics and Society*, New York: Praeger.

- Boustani, Rafic and Philippe Fargues eds. [1991] *The Atlas of the Arab World: Geopolitics and Society*, New York and Oxford: Fact on File.
- Collelo, Thomas, ed. [1988] *Syria: A Country Study*, Area Handbook Series, Washington, D.C.: U.S Government Printing Office.
- Commings, David [1996] *Historical Dictionary of Syria*, Arab Historical Dictionaries, No. 22, Lanham and London: Scarecrow Press.
- Efrin.net (<http://www.efrin.net/>) [2004a] “ Muḥāṣara al-Ṭalaba al-Akrād fī Jāmi'a Ḥalab ” (アレッポ大学でクルド人学生が包囲), March 14.
- [2004b] “ Taḏāhurāt Silmīya fī al-Jazīra Tuwājīh-hā al-Sultāt bi-al-Qatl ” (ジャズィーラでの平和的デモ, 当局との衝突で死者), March 14.
- [2004c] “ I'tisām amāma Majlis al-Sha'b Ihtijājan 'alā Majzara al-Qāmishlī ” (カーミシュリー虐殺に抗議して, 人民議会前で座り込み), March 15.
- [2004d] “ Qam' Damawī wa I'tiqālāt Wāsi'a fī Ḥalab wa 'Afrīn ” (アレッポとアフリーンで血の弾圧と大規模逮捕), March 16.
- [2004e] “ Fī Khaṭwa Jadīda li-Qam' al-Nashāt al-Kurdī: al-Sultāt al-Sūrīya Taḥlūb min al-Aḥzāb al-Kurdīya Tark al-'Amal al-Siyāsī wa al-Taḥarruk ilā Jam'iyyāt Thaqaḥīya ” (クルド人の活動弾圧の新段階 シリア政府はクルド政党に政治活動の断念と文化団体としての活動を要請), June 2.
- [2004f] “ al-Sultāt al-Sūrīya Tastamirr fī Istid'a' Mas'ulī al-Aḥzāb al-Kurdīya li-Iblāgh-hā Qarār Man' Nashāt Aḥzāb-ha ” (シリア政府はクルド政党幹部の召喚と党活動停止に関する決定の通達を継続), June 3.
- [2004g] “ Ihāla Mu'taqalīn Akrād ilā al-Qaḍā' al-'Askarī fī Dimashq ” (クルド人逮捕者がダマスカス軍事裁判所に起訴), June 12.
- [2004h] “ Ihāla Da'fa Jadīda min al-Mu'taqalīn al-Akrād ilā al-Qaḍā' al-'Askarī fī Dimashq wa Ihāla Milaffāt Ba'd al-Aḥdāth al-Mawqūfīn ilā Qāḍī al-Taḥqīq fī 'Afrīn ” (クルド人逮捕者が新たにダマスカス軍事裁判所に起訴, 複数の事件での逮捕者がアフリーン判事に起訴), June 26.
- Gunter, Michael M. [2004] *Historical Dictionary of the Kurds*, Historical Dictionaries of People and Cultures, No. 1, Hanham, Maryland and Oxford: Scarecrow Press.
- Ḥamīdī, Ibrāhīm [2004a] Sūrīya: 'Asharāt al-Qutlā wa al-Jarḥa fī Shaghb Jumhūrī al-Futūwa ” wa “ al-Jihād ” (シリア 「アル=フトウワ」対「アル=ジハード」戦での民衆暴動で数十人が死傷), *al-Ḥayāt*, March 13.
- [2004b] “ Sūrīya: al-Shaghb al-Riyādī Taḥawwala Mawja 'Unf Imtaddat ilā Dimashq ” (シリア スタジアムでの暴動がダマスカスに暴力が波及), *al-Ḥayāt*, March 14.
- [2004c] “ Dimashq: Mas'ulūn Yaltaqūn Shakhṣiyāt Kurdīya wa Taḥdhīr

Murtakibī al-Shaghb min Musā'ala Qānūnīya (ダマスカス 高官がクルド人と会見，暴動に加わった者たちを尋問すると警告)，*al-Hayāt*, March 15.

[2004d] “ Dimashq: Infitāḥ li-Ḥall Mushkila al-Maktūmīn wa al-Akrād lā Yaḥtājūn ilā Ḥimāya Amīrikā ” (ダマスカス マクトウム問題解決に向けて門戸開放，クルド人には米国の庇護は不要)，*al-Hayāt*, March 19.

[2004e] “ Zībārī ilā Dimashq fī Awwal “ Ziyāra Rasmiyya ” wa Iṭlāq 720 Kurdīyan ‘ashīya ‘īd Nūrūz ” (ズィバーリーがダマスカスに初の「公式訪問」，ノールーズ前夜にクルド人720人釈放)，*al-Hayāt*, March 21.

[2004f] Sūriya: Iḥāla 22 Muttahaman ilā al-Maḥkama al-‘Askariyya (シリア 容疑者22人が軍事裁判所に起訴)，*al-Hayāt*, April 11.

Ḥamīdī, Ibrāhīm and Nūr al-Dīn al-A‘thar [2004] “ “ al-Ḥayāt ” Tajūl ‘alā Mudun Shamāl Sūriya: Ijra‘āt min Ta‘līmāt li-Man ‘Tajammu’ al-Akrād wa al-Ahālī ” (『アル＝ハヤート』紙がシリア北部の都市を取材 クルド人と地元住民の集会を禁じる通達発令)，*al-Hayāt*, March 19.

Ḥaydar, Ziyād [2005] “ “ al-Jabha al-Taqaaddumīya ” Tuqīrr Mashrū‘ Qānūn li-l-Aḥzāb Yunazzim al-Ḥayāt al-Siyāsīya .. wa Yamna’ Tadāwul al-Sulṭa ” (「進歩（国民）戦線」は政治生活を調整し...政権交代を禁止した政党法案を承認)，*al-Safir*, November 9.

Hevgirtin.org(<http://www.hevgirtin.org/>) [2004] Iḥāla 22 Kurdīyan ilā al-Maḥkama al-‘Askariyya fī Ḥalab (クルド人22人がアレッポ軍事裁判所に起訴)，April 17.

Ḥizb ‘Azādī al-Kurdī fī Sūriyā [2005] “ Tawdīḥ ” (声明)，October 18.

al-Ḥizb al-Dīmuqrāṭī al-Kurdī al-Sūrī [2005] “ Taṣrīḥ ” (声明)，June 12.

al-Ḥizb al-Dīmuqrāṭī al-Taqaaddumī al-Kurdī fī Sūriyā - Maktab al-I‘lān [2005] “ “Anāṣir Ḥizb Yakīti Kānū Munāfiqīn wa Dajjarīn ” (イエキーティー党の連中は偽善者だ)，August 21.

Ḥizb al-Ittiḥād al-Dīmuqrāṭī fī Sūriyā - al-Lajna al-Tanfīdhīya [2005] Bayān ilā al-Ra’y al-‘Amm min Ḥizb al-Ittiḥād al-Dīmuqrāṭī al-Kurdī ḥalwa I‘lān Dimashq (ダマスカス宣言に関するクルド民主連合党から世論への声明)，October 19.

Ḥizb al-Ittiḥād al-Sha‘bī al-Kurdī fī Sūriyā - al-Lajna al-Markazīya [2003] “ Ḥizb al-Ittiḥād al-Sha‘bī al-Kurdī Yu‘lin Muqāṭa’a al-Intikhābāt fī Jamī’ al-Manāṭiq: Bayān ḥawla “al-Intikhābāt” al-Muqbila fī al-Bilād ” (クルド人民連合党は全選挙区での選挙ボイコットを宣言 シリアでの次期「選挙」に関する声明)，February 22.

Ḥizb al-Waḥda al-Dīmuqrāṭī al-Kurdī fī Sūriyā (Yakīti) [2005a] “ Taṣrīḥ: Nuṭālib al-Sulṭāt al-Mas’ūla, bi-Taḥdīd Maṣīr al-Shaykh Muḥammad al-Khaznawī wa Iṭlāq Sirāḥ-hi ” (声明 我々は政府にシャイフ・ムハンマド・ハズナウィー

- の行方解明と釈放を求める), May 12.
- [2005b] “ al-Mahkama al-‘Askariya al-‘Ulā bi-Dimashq Tastatīb al-Dafa al-Rābi’a min al-Mu’taqalīn al-Kurd ” (ダマスカス最高軍事裁判所はクルド人逮捕者に対して 4 度目の改悛を求める), March 17.
- [2005d] “ Istijwāb al-Dafa al-Khāmisa min al-Mu’taqalīn al-Kurd min Qibal al-Mahkama al-‘Askariya ” (軍事裁判所でのクルド人逮捕者に対する 5 度目の意見聴取), March 25.
- Hizb Yakītī al-Kurdī fī Sūriyā [2003a] “ Mawqif Tawdīhī ” (立場表明), February 22.
- [2003b] “ Bayān ” (声明), February 23.
- [2005] “ Man‘ Ahālī al-Qāmishlī min al-Ihtifāl bi-Iṭlāq Sirāḥ al-Mu’taqalīn al-Kurd ” (カーミシュリー市民がクルド人逮捕者の釈放の祝賀を禁じられる), June 27.
- Hizb Yakītī al-Kurdī fī Sūriyā - al-Lajna al-Qānūniya [2005] “ Taṣrīḥ: al-Ḥukm bi-al-Sijn Thalāth Sanawāt wa Sanatayn bi-Ḥaqq Khamsata ‘Ashara Mu’taqalan Kurdīyan ” (声明 クルド人逮捕者15人に対して禁固 3 年ないしは 2 年の判決), February 15.
- Hizb Yakītī al-Kurdī fī Sūriyā - al-Lajna al-Siyāsīya [2005a] “ Taṣrīḥ ḥawla al-I’tisām fī Dimashq li-Mu’tālaba bi-Iṭlāq Sirāḥ al-Mu’taqalīn ” (逮捕者釈放を求めるダマスカスでの座り込みに関する声明), May 30.
- [2005b] “ Taṣrīḥ: Naḥnu Lasnā Ma’nīyīn bi-mā Warada fī I’lān Dimashq ” (声明 我々はダマスカス宣言の文言と無関係である), October 16.
- Hopwood, Derek [1988] *Syria 1945-1986: Politics and Society*, London: Unwin Hyman.
- Human Rights Watch [1993] *Human Rights Watch Report 1994*, New York: Human Rights Watch.
- [1996] *Syria: The Silenced Kurds*, Vol. 8, No. 4 (E), New York: Human Rights Watch.
- Hurewitz, J.C [1969] *Middle Eastern Politics: The Military Dimension*, New York: The Council on Foreign Relations by Frederick A. Praeger.
- Husaynī, ‘Abd al-Bāqī [2004] “ Ijtimā’ Wafd Kurdī ma’a Wazīr al-Difā’ al-Sūrī ” (クルド人使節団がシリア国防大臣と会見), Efrin.net, April 25.
- “ I’lān Dimashq li-l-Taghyīr al-Waṭanī al-Dīmuqrāṭī ” (ダマスカス国民民主変革宣言) [2005] October 16.
- al-Jabha al-Dīmuqrāṭīya al-Kurdīya fī Sūriyā and al-Taḥāluf al-Dīmuqrāṭī al-Kurdī fī Sūriyā [2005] “ Ijtimā’ Waṭanī fī Manzal ‘Abd al-Ḥamīd Darwīsh li-l-Tabāḥuth fī al-Hamm al-Waṭanī al-Mushtarak ” (国民共通の関心を議論すべく、アブドウルハミード・ダルウィーシュ邸で国民会合), June 6.

- Jam'īya Huqūq al-Insān fī Sūriyā [2003] *Ṭaqrīr 'an Wāqī' al-Akrād al-Mujarradīn min al-Jinsīya* (国籍を剥奪されたクルド人の現状に関する報告), Damascus: Jam'īya Huqūq al-Insān fī Sūriyā.
- [2004] *Ṭaqrīr 'an Aḥdāth al-Qāmishlī wa Tadā'iyāt-hā fī Ba'd al-Mudun al-Sūriya* (カルミシュリー事件およびシリア諸都市での関連事件に関する報告), Damascus: Jam'īya Huqūq al-Insān fī Sūriyā.
- Khoury, Philip S. [1987] *Syria and the French Mandate: The Politics of Arab Nationalism 1920-1945*, Princeton: Princeton University Press.
- Kinnane, Derk [1964] *The Kurds and Kurdistan*, London and New York: Oxford University Press.
- Lajna al-Tansīq al-Waṭanī li-l-Difā' 'an al-Ḥurrīyāt al-Asāsīya wa Huqūq al-Insān [2005a] ' Da'wa ilā al-Sha'b al-Sūrī li-l-I'tisām min ajl al-Muṭālaba bi-Itlāq Sirāḥ al-Mu'taqalīn al-Siyāsīyīn " (シリア人民への政治犯釈放要求の座り込みの呼びかけ), May 26.
- Lawson, Fred H. [1988] " Political-Economic Trends in Ba'thi Syria: A Reinterpretation , " *Orient*, Vol. 29, No. 4, pp. 579-594.
- al-Maḥmūd, Muḥammad [2003] " Limādhā Ṭuriḥa al-Mas'ala al-Kurdīya fī Sūriyā al-Ān " (シリアのクルド問題はなぜ今提起されたか?), *al-Quds al-Arabī*, January 7.
- Majmū' al-Aḥzāb al-Kurdīya fī Sūriyā [2003] " Bayān ilā al-Jamāhīr al-Waṭanīya al-Dīmuqrāṭīya " (国民的・民主的人民への声明), February 17.
- [2004a] " Bayān " (声明), March 12.
- [2004b] " Nidā' " (呼びかけ), March 13.
- [2004c] " Siyāda al-Ra'īs al-Duktūr Bashshār al-Asad " (バッシャーール・アサド大統領・博士へ), March 15.
- [2004d] " Taṣrīḥ Ṣādir 'an Ijtimā' Qiyāda Majmū' al-Aḥzāb al-Kurdīya fī Sūriyā " (シリアにおけるすべてのクルド政党指導部会合声明), March 15.
- [2004e] " Bayān bi-Munāsaba Nūrūz " (ノールーズによせた声明), March 17.
- [2004f] " Ta'mīm " (公示), March 19.
- [2004g] " Taṣrīḥ Ṣādir 'an Ijtimā' al-Aḥzāb al-Kurdīya " (クルド政党会合声明), March 19.
- [2004h] " Taṣrīḥ Ṣādir 'an Ijtimā' Majmū' al-Aḥzāb al-Kurdīya fī Sūriyā " (シリアにおけるすべてのクルド政党会合声明), June.
- [2005] " Bayān Majmū' al-Aḥzāb al-Kurdīya fī Sūriyā bi-Sha'n al-Ifrāj 'an al-Mu'taqalīn al-Akrād " (クルド人逮捕者の釈放に関するシリアにおけるすべてのクルド政党声明), March 31.
- Mannā' Haytham [2004] *'Adīmī al-Jinsīya fī Sūriya (min Ghayr al-Lāji'īn al-*

- Filasṭīniyyin*) (シリアにおける国籍剥奪者 [パレスチナ難民を除く]), 3rd edition, Malakoff: al-Lajna al-'Arabīya li-Ḥuqūq al-Insān.
- al-Mawqif al-Dīmuqrāṭī* (民 主 的 立 場)[2005] Special Number: I'lān Dimashq li-Taghyīr al-Waṭanī al-Dīmuqrāṭī (ダマスкас国民民主宣言), November.
- McDowall, David [1992] *The Kurd: A Nation Denied*, London: Minority Rights Group.
- [2000] *A Modern History of the Kurds*, 2nd revised and updated edition, London and New York: I.B. Tauris.
- Middle East Watch [1991] *Syria Unmasked: The Suppression of Human Rights by the Asad Regime*, New Haven and London: Yale University Press.
- Mithāq al-Jabha al-Waṭanīya al-Taqaḍdumīya* (進 歩 国 民 戦 線 憲 章)[1972], Damascus: al-Idāra al-Siyāsīya li-l-Jaysh wa al-Qūwāt al-Musallaha.
- al-Munāḍī*[1966] Taqrīr li-Khuṭṭa Inshā' Mazārī' Ḥukūmīya fī Muḥāfaẓa al-Ḥasaka " (ハサカ県の政府農場開発計画決定), No. 11, November, pp. 12-13.
- Nazdar, Mustafa (tr. by Michael Pallis) [1980] " The Kurds in Syria, " in Gerard Chailand ed., *People without a Country: The Kurds and Kurdistan*, London: Zed Press, pp.211-219.
- Ramaḍān, Ramaḍān [n.d.] " Sha'b Mansī wa Dustūr Ghā'ib: " Qirā'a fī al-Mas'ala al-Kurdīya fī Sūriya "(忘れられた人民 , 存在しない憲法 シリアにおけるクルド問題の解説), *Muqārabāt*, No. 1 (<http://hem.bredhband.net/dccls/mo9.htm>, 2003年3月アクセス).
- al-Ra'y al-'Āmm* [2003] " Akrād Sūriya Yatazāharūn fī " Yawm al-Ṭīf " wa Dimashq Ta'tabir-hā " Madfū'a min al-Khārij "(シリアのクルド人が「子供の日」にデモを実施 , ダマスкасは「外国が唱導した」とみなす), June 27.
- Rabinovich, Itamar [1972] *Syria under the Ba'th 1963-66: The Army-Party Symbiosis*, Jerusalem: Israel University Press.
- Ṣādiq, Maḥmūd [1993] *Ḥiwār ḥalwa Sūriya* (シリアをめぐる対話), London: Dār 'Akkār.
- Sarūjī, Shīrkū [2004] " Manaṭiq al-Akrād al-Sūriyīn: al-Dhikrā al-30 li-Zar' " al-Mustawṭinīn al-'Arab "(シリアのクルド人地域 「アラブ人移民」入植30周年), *al-Nahār*, June 23.
- Ṣawt al-Akrād: Dengē Kurd* [2002] Ra'īs al-Jumhūrīya Yazūr Muḥāfaẓa al-Ḥasaka (大統領がハサカ県訪問), No. 334 (August) 1-2.
- Seale, Patrick [1965] *The Struggle for Syria: A Study of Post-War Arab Politics, 1945-1958*, London: Oxford University Press.
- Tachau, Frank [1994] *Political Parties of the Middle East and North Africa*, The Greenwood Historical Encyclopedia of the World's Political Parties, Westport: Greenwood.

- al-Taḥāluf al-Dīmuqrāṭī al-Kurdī fī Sūriyā and al-Jabha al-Dīmuqrāṭīya al-Kurdīya fī Sūriyā [2003] “ Balāgh Ṣādir ‘an al-Ijtimā’ al-Mushtarak bayna Qiyādatay al-Jabha al-Dīmuqrāṭīya al-Kurdīya fī Sūriyā wa al-Taḥāluf al-Dīmuqrāṭīya al-Kurdīya fī Sūriyā ” (シリア・クルド民主戦線 , シリア・クルド民主同盟両指導部共同会合声明) , February 23.
- Tayyār al-Mustaqbal al-Kurdī fī Sūriyā - Maktab al-‘Alāqāt al-‘Āmma [2005] “ Bayān: Najid fī l’lān Dimashq Khaṭwa Mutaqaddima lākinna al-Wujūd al-Qawmī al-Kurdī ghayr Qābil li-Tafawuḍ ” (声明 ダマスカス宣言が進歩的なステップだとみなすが , クルド民族の存在が取り上げられていない) , October 18.
- al-Thawra [2005] “ al-Mu’tamar al-Quṭrī al-‘Āshir li-Ḥizb al-Ba’th Yakhtatim A’māl-hu wa Yuqirr al-Taḥārīr wa al-Tawṣīyāt ” (バアス党第10回地域大会が閉幕し決議と提言を採択) , June 10.
- Torrey, Gordon H. [1975] “ Aspects of the Political Elite in Syria. ” in George Lenczowski ed., *Political Elites in the Middle East*. Washington, D.C.: American Enterprise Institute, pp.151-161.
- van Dam, Nikolaos [1979] *The Struggle for Power in Syria: Sectarianism, Regionalism and Tribalism in Politics, 1961-1980*, London: Croom Helm.
- Yekīti [2000a] “ al-Kurd fī al-Suwayd Yuḥyūn al-Dhikrā al-Arba’in li-Ḥarīq Sīnimā’ Āmudā ” (スウェーデンのクルド人がアームーダ映画館火災40周年を追悼) , No. 67 (November) (<http://home.c2i.net/yekiti/67.htm>) .
- [2000b] “ Jarīda Tajammu’ al-Zarkī Tuwajjih al-Ittihāmāt li-l-Aḥzāb al-Kurdīya fī Sūriyā ” (ザルキーの連合の機関紙がシリアのクルド政党を疑問視) , No. 68, December (<http://home.c2i.net/yekiti/68.htm>) .